62
263

基督教叢書

IMAGO CHRISTI:
The Example of Jesus Christ

基督の模範

後篇

特18
749

基督教叢書

IMAGO CHRISTI :
The Example of Jesus Christ

基督のぞがた

後篇

基督のすがた後篇目次

第九章　事業家たる基督……百六十一丁
第十章　受難者たる基督……百七十五丁
第十一章　博愛者たる基督……百九十五丁
第十二章　靈魂の敎化者たる基督……二百十五丁
第十三章　說敎者たる基督……二百三十七丁
第十四章　敎師としての基督……二百五十九丁
第十五章　對論家たる基督……二百八十一丁
第十六章　感じの人あるる基督……三百一丁
第十七章　感化者たる基督……三百十七丁

第九章　事業家たる基督

馬太傳四章廿四節
同　八章十六、十七
同　九章三十五
同　十一章一、四、五
同　十二章十五
同　十三章二
同　十四章十三、十四、廿五、廿六
同　十五章三十
同　十九章一、二

馬可傳二章二
同　三章二十
同　六章廿一、五十四—五十六
同　十三章三十四
同　十四章八

路加傳六章十九
同　十章二
同　十二章一
同　十三章廿二、廿三

約翰傳、二章四
同　四章廿二、—廿四
同　七章六、八
同　九章四
同　十二章廿三
同　十七章四
同　十九章三十

第九章　事業家たる基督

勞動に關する理想は二種あり。甲は成るべく勞動をして少からしめんことを期し、乙は成るべく之を多からしめんことを期す。東洋の人、甲種に屬するもの多しとす。東洋の人、氣候温暖の地に栖み、勞動すれば、容易に疲倦するを感じ、爲すことも無く、逸居するを以て此の上も無き快樂となすの傾きあり。閑散夢遊の生涯は、盡し彼等の渴望し止まざる所あり。其の寛ける衣、濶く長き袖は、明かに彼等が好尚の存する所を示すものといふべし。西洋の人は然らず、元氣旺盛活潑にして、事功を營ふこと、飲食より甚しきものあり。其の衣服は東洋人の着用するところに比べて、風流都雅の性質を欠けりといへども、務を執るに利にして、進退頗る自由あり。其の平生の遊戲、また甚だ活潑にして、目覺しいと謂ふを得べし。東洋人は務果つるや、悠々安臥す。

歐州の人は然らず、其の日の事終るや、遊獵あらざれば「フートボール」を試むるが如き習慣あり。

同じく西洋にありても、勞動に關する一箇人の好尚區々なるを見る。其の昏睡質の人は、勞を避けて、動もすれば、懶惰に流れんとす。之に反して多血性の人は、事功を貪るの念强く、間斷無く、戰爭の如き、有樣に居るにあらざれば、滿足し難きがごとし。或ひは勞動の結菓として、終に無爲安樂の身とならんことを企圖するものあり。之を目けて紳士の生涯といふ、心ある人は中々之れに滿足することを能はず。幸ひにして糊口の爲めに、勞動するを要せざる地位に達するときは、力を社會の事、國家の事に致し、教會の爲めに奔走す。社會にも教會にも、斯る閑散の人にあらざれば、成し難き事業少しとせず。人類の幸福、社會の安寧にして、此ら紳士の盡力に依れるもの實に少しとせざるなり。

邦土の別、天性の差違に依りて、人の勞動に處するの道を異にする此くの如し。主耶蘇基督は其の訓誨に由り、實例に由りて、吾等の事業において、則るべきの典型を示し給ひき。

一

基督は身自ら、工人の家に生れ、久しき間、村落に家工の職を執りて、世を送れり。是れ豈に偶然ならんや。其の勞動論に關すること、決して少小にあらざるなり。ユダヤ人は其の「ミサイア」の王者ならんことを期したり。然れども神は其の勞動者たらんことを豫定し給ひぬ。是の故に、耶蘇基督は、ナザレなる村民の家を造り、農人の車を製し、兒童の玩器を繕ひたまひしなり。主自ら勞動を爲したまひぬ。其の高貴なること以て見るべきあり。グリシヤ人、ロマ人は、勞動を卑しめて、たゞ奴隷の身に相當しきことなしたり。今日といへども、人情動もすれば、此の弊に陷るの虞あり。然れども人の子の實例は、永遠に至るまで、勞動の尊貴を維持するに足れりとす。工人は宜しくナザレの耶蘇が自ら工場に立ち、鑿鋸を仕用せるこ

とを、記臆して其の勞動に謳歌すべきあり。

心は上帝の肖像なり。勞動は無靈無覺なる物体の上に、心靈の德を印するなり。勞動は人類の幸福に資し、一個人をして、天下の同胞と、もに、物界を占領するの事業に與かることを得せしむ。勞動をあすものは、之がために忍耐、忠恕、正直の德を養はる。其の自らに益あること、また大ひなりとす。凡そ人其の執務を嫌惡するは、其の身を陋ならしむるに異ならず。

二

凡そ何の事業たるを問はず。如何に微々たる營業にても之を爲すこと宜きに適はゞ、咸尊敬するに足れりと謂はざるべからず。然れども、凡ての營業、決して、一樣に尊貴ならず。其のうちには、人類の幸福を助くるに於て、彼此差異あるを免れざるなり。蓋し最も多く、人を益するものを以て、最高の地位に置かずんばあるべからず。

耶蘇が工匠の職を辭して、教を宣べ、病を愈すに從事したまへるも、全く上に記載せる主義に基づきて、事業の輕重を定め給ひしなり、宣教の職は、直接に靈魂に事へ、治療のことは、肉体に關す。事業の貴高なる何ものか之れに過ぐるものあらん。殊に基督が之れに從事し給ひしに由り、醫師宣教師の職は、更に其の光榮を增せりと云はざるべからず。右の二職に從事するものにして、其の事業の即ち基督の足跡を歩むことなりと思ふより、自ら快然たる心地となり、勉强の精神を振ひ作されし人少からざるべし。

斯く其の事業は三十にして改まりたれど、其の勤勉に至りては、依然として一なり。手の働き、最も勞するか。頭腦の勞動、手に比ふれば、更に甚だしきものあるか。職工は思へらく、彼紳士は、飽食煖衣逸居して、手には粗造なる器具を執らず、肩には重き荷を負ふことなし。何ぞ其の生活の安らかなるやと。之れに反して心力を勞するの職に從事する人はいはく、

我日夕頭を病しめ常に責任の重きを感じ、事多きがために、時として眠食を廢するに至らんとす。彼の職工の生涯こそ羨ましけれと。此の爭論は、容易に決し得べきにあらず。然れども、耶蘇の一身に就きて、之を言へば、其の最も困難なる事業は、之を變更し給へる時より始まれりと謂ふを得べし。其の三年の傳道は、勞動山の如くに群り居たり。耶蘇の至るところは、何所にても、衆多の人々、之に附き從ひ、遠近競ふて之れに集まりぬ。時としては主の寓居の内外に、錐を立つるの隙も無く、或は止むを得ず屋上を撤して、面會せんと、試みしものありたる程なり。また時としては、食事をなすの暇なきこともありたり。今は多忙の時代なり。忙中に日を經過するものは、宜しく、耶蘇を仰ぎ瞻て、此の重きを負ふの精神を學びなば則ち可なり。

三

耶蘇曾つて敎を爲して云く、吾等は上帝の臣僕にして各、なすべきことを命せられたり。其の成績い必ず神の問ふ所とならんと。

或る人將に遠く旅行せんとす。其の僕どもに、若干の金を委托せしが、其の額一樣ならず、多少の差異ありき。蓋し其の不在中、僕らをして、委托金を運轉し、許多の利を附けて、返付せしめんことを望めるあり。忠實ゑ主の囑托を奉じ懇ろに其の金の增加を圖れるものは、主の喜悅ゑ入り、手を空ふして之を輕忽ゑ附し去りしものは、外の暗きゑ棄てられたり。此の譬喩まことゑ儼かなり。之を聞くもの誰か戰々競々たらざるを得んや。

人生を視ること此の喩言の如し。何ぞ其の嚴重なるや。然れども基督は、此の嚴重なる思想を以て、其の事業を爲すの主義としたまへり。主い非常なる事を爲すの力あり。然れども、其の世ゑ在りて、事を爲すの日永からざるは、熟てより熟知し給へる所なり。故を以て、片時も之れを安りに費さず、凡そ事を行ふ、必らず其の時ゑ從がひ、敢て之れゑ後るゝことをせず、又敢て之れより速きに失することなかりき。曰く、我が時い、未だ至ら

ざるなりと。耶蘇は明かに、其の時を知り給へり。また其の業を終らざれば、已れの死ぬまじきことをも知りたまへり。人の世にあるや、事をなすべきの十二時間あり、其の終らざる間は、天の攝理の陰に安然として潤歩するを得べし。是の故に、耶蘇は危きに臨むも自若たりしなり。且つ時の進むに隨ひ、其の事業の熱心益々加はり、生涯の志胸間に燃ふるがごとし。主が最後にエルサレムに上るや、門徒は其の氣勢に駭き、恐るゝ其の後邊に隨へり。耶蘇云く、我は畫のうちに、われを遣せしものゝ業を爲さゝるべからず、人の働くこと能はざる夜まさに來らんとすと。

四

功竣りたるときは、事業家の愉快言ふべからざるものあり。職工が物品を製作して、其の成功稍己れの意に適するときは、天に昇る心地せらるゝならん。詩人は其の天才を發揮して金玉の句を陳ね、稿まさに成るに及べば、大將が敵城を拔き、英雄が大國を征服したるが如く感ずること

あるべし。ウイルリヤム、ウイルベルフオルス奴隷廢止の事業に從事し、百難を排して、終に英國々會の多數を制し、將に此の世を辭し去らんとするに臨みて、一生の企圖成就し、今より以降、英國の版圖内に一人の奴隷なきに至らんとの報に接したり。其の喜悅想ふべきにあらずや。耶蘇基督もまた此の歡樂の水を飲み給ひき。其の事業や、常に完全なり。而して僉博愛慈仁の目的に發して、永久に保存せらるべきものあり。其の經過するところの日子い、徒らに消費せられずして、何れも神の指定し給へる事業を以て充實されざるいなし。宣なる哉、耶蘇が我を遣せしものゝ意旨を行ひ、其の業を成す、是れ即いち吾が糧なりと宣べるや。終に十字架に釘けられ、已れが任命せられし最後の條欵なる死に臨みたまひしとき、事終れりの一言を叫びて、世を去り給ひぬ。是れ宛かも、兵士が戰場に重傷を負ひ、戰勝の確報に接し、莞爾として瞑目するに異ならず。獨り基督の戰勝および事業の報償は、未だその究極に達せざるなり。

其の結菓は世代を累ぬるに從つて、いよ〳〵繁く、其の言はいよ〳〵深く、人の心に入り、其の感化力漸く世界の局面を變革し、天は將に其の血を流して贖ひたるものを以て充滿せられんとす。聖書に云く、彼い其の靈魂の煩勞を見て、將に心に滿足せんとすとある即ちこれなり。

五

休息は勞動と等しく人生に欠くべからざるものなり。善く働かんと欲するものい、善く休息せざるべからず。

耶蘇基督は多忙の人なれど、急遽の人にあらず。事務山の如く蝟集するも、曾て紛亂混雜の弊に陷らざるあり。其の泰然自若として少しも騷がず、常に能く威儼を保てるは、其の性行中著るき項目なりとす。

基督の事をなすや、必らず先づ其準備あり。主は時に先き立たず。又時機後れ給はざりき。世人の心氣を勞するを見るに、多くは今日に於て、明日の苦みを豫じめし、昨日爲すべきの時機を空過して之が爲に今日の困却を來らせるに非るもの稀あり。人若し既往將來の業は、之れを己往將來に任せ、今日に於ては、今日なすべきの事を爲さば常に綽々乎として餘裕あるを得ん。マルチンセン曰く、美術的に之を言へば、暇なきは天才に乏しきなり。蓋し天才は少時間に事を爲して能く其の機を外さず。天才なきものは無限の時に於ても之れを成就すると能はざるあり。然れども、道德上より之を言へば、暇なきは、德義的の氣力に乏しく、智慧に於て缺くるところあるに起因すと。豈察せざるべけんや。

耶蘇が三十年間靜かに家に在りて、家工の職を營めるい其の事業の準備たるなり。此の準備あり。而してのちに其の事業あるを見る。身を立て功を成さんと欲するものい、深く此に注意して可なり。

基督い多忙のなかにおいて、獨立を賴み、心の平和を維持するの用心を爲し給へり。人余りに多く押し掛け來り、余りに長く其の時間を塞ぐことあれば、自ら退きて曠野に隱れたまひき。一日を頗る多事に過すとき

ん、暫らくの間身を自然界と上帝の懷に投じて休息を取り給ふ。是れ吾等の好摸範にあらずや。其の門人の疲勞一ト方ならざるを見れば、之れに勸告して曰く、爾ら荒野に往きて、暫らくの間休息せよと。事務の中に立ちて、能く一身を獨立することを極めて肝要なりとす。事情の奴となり、人の招きに追ひ役われて、神と交通するの暇もなきに至るは不可なり。自ら想ひ、自ら養ふことの人生に必要なるい論するを俟たざるなり。

第十章　受難者たる基督

馬太傳二章十三―十八
同　四章一
同　八章十六、十七、二十
同　九章三
同　十一章十九
同　十二章二十四
同　十三章五十四―五十八
同　十六章廿一
同　十七章廿二、廿三
同　二十章十七、―十九
同　廿六章
同　廿七章

馬可傳三章廿一、廿二
同　八章十七―二十一
同　九章十九
同　十四章五十

路加傳四章二十八、二十九
同　六章七
同　十一章五十三、五十四
同　十六章十四

約翰傳六章六十六
同　七章七、十二。十九、二十。三十二、五十二、
同　九章十六、二十二、二十九。
同　十章二十、
同　十二章十、十一、二十七
同　十五章十八
同　十七章十四
同　十八章二十二

第十章　受難者たる基督

一

事業は只生涯の一半のみ。其の一半は即ち患難なり。此の世の半球は事業の日向なれども、他の半球は即ち患難の影なり。

此の二の者は、彼の地球が回轉して暗きより光に移り、光より暗きに入るに期を過たざるが如く旋り來るものに非ずと雖、此の二元素の配劑の妙なるは、何ものも之れに過ぎたるはあらず。或人は終日其の成效に得々として生涯殆んど災厄、不幸、失敗の何ものたるを知らず、或人は患難の爲めに患難を嘗め盡くすあらん。人生い悲慘の境なり、死い絶えず門を打ち叩きて我等最上の珍寶を求むるを以て、喪の悲しみを免るゝものい、一人もあらじ。肉体の健康い頼みになり難し。高大の事業い胸中に浮びたるとありとするも、熱度、冷却したらん日、已が志を實行するの

体力なきと豫て自身の承知し居る所あり。身殆んど病を知らず、功名い日々に彌増さりて樂しく暮らせる人々よ。乞ふ往ひて不治の病に罹り、床上よ苦悶するものを見よ。其の人或い汝に優れる知慧あるあらん。又汝の如く樂しみ喜ぶ情あるならん。されど見へざる鎖い其の肘を纏ひ、堅く縛りて動かさしめず。元氣は十年乃至廿年よ至りて衰へざるを得しとするも、今や己が力い己が身を擡ぐる能いず。之れを見る者い夫れ如何あるる感を起すべき乎。勿論是れ幾多の例の中にて其の極端なる一例ありとは云へ、悲しみの子は其の數夥し、而して何れの時に事業の生活一變して患難となるを知るもの一人もなし。鐵槌い時をも定めず天外より墜ち來りて万物を破碎せんとす。わづか手掌大の雲も遂には廣がりて一天に墨を流すべし。假しや斯る恐ろしき禍の來らずとも、早晩若干の患難に遭いざるいあらず。

如何に監護り育つればとて、一匹の死せる羊もなき群いあらし。

如何ほど防ぎたればとて、一脚の空しき椅子もなき家いあらず。されば患難い塗抹し得べからざる人生の一元素なり。我等若し如何よして働くべき乎を知るを要する乎、是れと等しく又如何よ艱みに堪ふべき乎を知らざるべからず。而して人の子い我等を棄て給ふとなし。抑も基督い事業の大主領にして能く勇往敢進の英氣を鼓舞し、又艱めるものゝ友として弱き者、失望せる者、痛める者を其の邊りに集め給ふ。其の十字架上にありて我事終りぬと叫び給ひしい、只已が事業を首尾能く成し果せたるのみの謂ひにいあらず。又一滴も殘さず苦しみの杯を飲み干し給ひしを云へるなり。

二

耶蘇い人類よ普通ある不足欠乏の爲めに苦しみ給へり。身い馬槽の内よ生れ、世に出づるの曉より苦難の暗黑界よ發程し給ひぬ。我等いその生長の有様を詳かよせず、又マリヤの家よ住ひ給ひし時も、果して欠乏

不幸の暗影中よりありしや否やを知らず、されど『狐には穴あり空の鳥には巣あり、されど人の子には枕する所なし』との一言は、後日の生況を察するに余りあり。人間の子として禽獸の巣屈を羨むまでに落魄せしと耶蘇の如きものは、其の例甚だ多からず。靈魂の宮殿、一たび破るれば、人生の最後多少の苦しみあるは、世の通則なり。されど耶蘇の終りに受け給ひし苦痛は非常のものよりてありしあり。試みよゲッセマネの園より血の汗を流し給ひしことを思へ、又其の殘酷なる士卒に笞たれ、荊冠を戴き、磔刑よ處せられしことを思へ。我等は必ずしも基督の如き大苦痛を受けたる者なしとは云へざれども、又然らずとも云ひ難し。蓋し基督の肉体は優美にして其の苦痛を感するとも尋常ならざるべければなり。

二　耶蘇は將よ來らんとする禍を豫想して痛く艱み給ひき。夫れ大なる悲しみ若しくは痛みの忽焉として來るとあれば、一時は驚慌して苦痛を感せず、其の已よ去るに及んで初めて痛みを覺ふるものなり。されと人若し病に罹り、今より六ケ月も經なば、その病狀一層重くなることを知りたらんには、其の心を惱すの強き、實際苦痛を受くる時よりも甚じきものあるべし。耶蘇は豫じめ己れの患難を知り給ひ、又豫しめ之れを弟子に告げ給へり。而して之れを知り、之れを語ると、月を經るに從ふて益〻精細となり、その想像は愈〻堅固となれり。此の豫想に發したる恐懼はゲッセマネに於て頂点に達し、煩悶苦痛の余り、其の顏より血の如き汗を滴らし給へり。

三　基督はその心に他人を艱ましむるの原因となりしを感じて艱み給へり。人あり或困難ある者を憐れみ幸福なる身とならしめんとせしに、彼れ却て我が爲めに奇禍を惹くとあらん乎。之れ他愛心あるものゝ尤も忍び難しとする所なり。ヘロデ耶蘇を求めて、ベツレヘムの嬰兒を殲にせしとの一話は、幼かりし耶蘇の胸を痛めし所なるべし。又耶蘇の母は此の慘劇を話し聞かせたるべければ、其の父母がヘロデの怨み

を避けて埃及(イジプト)に至りし顚末を知り居たるなるべし。又其の命の終らんとする頃に當りては、已れと關係あるの故を以てその朋友も禍を被ふるべしとの一念、益〻その胸を襲ひ、將に縛せられんとせし時、弟子等も連座せらるゝを悲しみ、此等を容して去しめよと宣へり。されど耶蘇は豫め世の弟子を惡むこと又已れの如くなるを明知し、而して云く、弟子等を殺すは、神に事ふる所以なりとなすの日來るへしと。亦基督の受け給ひし刑は、近代の死刑に於けるよりも當時の人の一層恥とせし所なりき、然るを基督は胸に劍を刺さるゝの思ひを以て之を傍觀し居たる已が愛母を目擊せざるを得ざりしなり。

四　基督の飲み給ひし患難の杯中にありて、恥の元素その大部を占む。恥は心の鋭敏なるものゝ堪え難しとする所にして、之れを恐ぶの難き遙かに肉体の苦に過ぎたり。ざるを基督の生涯の間、常に之れが爲めに追尾せられ、殆んと殘る方なくその攻擊を受け給へり。基督は家門の卑きが爲めに辱められ給へり。顯貴なる祭司、教育あるラビ等は文盲あるエ匠の子を侮り、財に富めるパリサイ人等も亦之れを嘲けり笑へり。其の狂人と呼ばれたるゝ決して一兩回よゝあらず、ピラトが耶蘇に接したるもの即ち其の一例なり。亦其のヘロデの前に來りし時よゝ、王も士卒も共に之れを藐視嘲弄し、審判の時、磔刑に掛る時よゝ、羅馬の士卒等、頗る無禮を極め、心の發達せざる小兒を以て之れを遇し、尙ほ飽き足らずして或ゝ其の面に唾し、或ゝ其の目を掩ひ、汝を撲つものゝ誰なる乎豫言せよといふに至れり。又絳色の袍を着せ、棘にて冠を編、其首に冠らせ、葦を右の手に持たせ、嘲りて之れを王と稱せり。基督の心ゝ、斯る境遇に處して必ず燃えしならん。亦基督ゝ已れの同胞國民がバラバを釋るせと呼ばるを聞き、遂に二盜の間にありて惡人中の最惡人なりしが如くにして死せり。其の死せんとするや、嘲弄の聲、四方に起り、路人ゝ口々に之れを罵り、ともに磔せられし賊の一人すら無禮の言をその唇より

漏らせり。されば耶蘇い、尤も強きものよりあるがら、尤も弱きものと做され尤も賢き者よりありながら、人間よりも尚ほ劣れる者として遇せられたるを忍び給へり。

五　されど耶蘇の尤も堪え難かりしい、聖き者よりあり乍ら、罪人の主領と看做されたるよあり。夫れ神を愛し、善を愛する者が偽善者と思はれ、言、行と相稱はざる大罪人とせられんと、何ものか之れより堪え難かるべき。而して是れ耶蘇が誤認されたまひし所なり。耶蘇い魔力を役し、魔王ベルゼバブを使ひて惡魔を退くと信ぜられ、其の名い神聖よりあるがら、尚ほ濱ず者、安息日を犯す者と稱せられ給ひしなり。其の勝れて正しき行い、却つて人の怪しむ所となり、稅吏や、罪ある人の友となりて迷へる者を救いんとし給へば、醉酒饕餮の稱を免かれ給ふ能いず。自ら「メサヤ」なりと明言すれば、却つて大贋なる欺騙者と呼いれ給へり。而して宗教上及び法律上の長者い判庭よその罪を定め、その弟子すらも

遂よい之れを振り棄て、一人い之れを賣り、一人の上足い之れを知らずと誣ひ、その將よ死よ際し給ひし時よい、一人も之れを「メサヤ」なりとい信ぜざりき。

六　以上述ぶるが如く、已れの未だ曾つて犯さゝる罪を被歸せらるゝは、基督よ取りて、甚だ心苦しきとよてありしあり。然れども之れよりも更よ物憂く、忍び難く感したるい、おのれを罪よ陷れんと試みられたまひしとなるべし。是れ實よ一兩回のみよあらず。通常曠野の誘惑は甚だしきを誤論誤認に所陷たりと聞たりけば、基督の考へざるを得ず。人々の考はいざ知らず、その生涯には獨りとなすに似たり。誤れるも又甚だしさいふべし。主の生涯は、曾て間斷なき絶えしも常なりき。吾等か讀む聖書は、毎葉殆んど皆の耶蘇基督が誘惑の試惑に當りか玉ひし顛末を示さんが爲めに聖靈之れを曹かしめたるもの神經の過敏、品性の試み、主義の試みにかいり給へり。基督は神なり。基督は人なり。不正なる質上の弱點、肉体の疲勞等よりて、非常に基督を驅りて、非常に起る怒り、誘惑の爲めに惱され給へり。不正なる質上の反對は常に基督を放棄に隨はざるを得ざらしめんと、反逆と放棄とは、基督を怒り、失望に賣り渡はさんと試みたり。其敵の陰謀、匪徒の輕浮弟子の無智等は、基督の精神を試みんと過はせず、却つて往々之れを悔ゆるべし。人を賣り、又悲しみて忍耐するべからざる罪に賣しめたり。すべて

る試惑は基督の生涯に於て嘗て絶えたるもなかりし也(The Mentae Characteristics of the Lord Iesus Christ)曾つて「サタナ」ハ曠野ヨおいて、之れを試みたり。福音書中、基督の試惑ヨかゝれることを、詳記せるもの、之を措て他ヨ見るべからずと雖、其後も屢其の攻擊を受けたまひしとハ、蓋し疑ふべからざるなり。獨り魔鬼のみならず、奸惡なる世人もまた百方術を盡くして之れを試みたるなり。聖書ヨ曰く、彼らハ最と激しく之ヨ迫り、其の隙を窺ひ、其の言を執へて之れを陷れんと企て、其の氣を激して多くのことを言ハしめんと圖れり。仇敵の之れを陷れんと企つるハ、聊か忍ぶことを得べし。其の友朋近親の人々が、之れを爲すヨ至りてハ、如何ばかりか聖意を痛めしことならん。蓋し彼等ハ基督一生の計畫を曉らず。之れをして神の任命を避けしめんと欲するヨ至れり。耶蘇或るときペテロヨ向ひてサタナよ吾が背後ヨ去れよと宣へることあり。平生ヨハ似たまハず、斯る猛烈なる聖言の出でじを見れば基督が此の誘惑の鋭鋒を太く感し給ひしことと見るべきあり。

七　清潔無垢の精神を以て、罪惡の汚穢充ち滿ちたる人間ヨ出入す。其の痛苦果して如何ぞや。善ハ惡を激發するの媒介となることあり、基督の神聖ヨして、盛德較著なることハ、適以てパリサイ、サドカイ徒の惡心を增長し、ピラト、ユダが汚行をなすの端を開けり。其の十字架上より、諸人の有樣を見渡したまふや、罪惡の怒濤漲り、人性の邪慾焰々として火の燃ふるが如くなりしならん。此の時ヨあたり、人類の罪惡擧りて其の上ヨ掩ひ來り、之を傷むこと、宛かちおのれの罪ヨ於けるが如き心地したまひしあらん。譬へば此ヨ父母ともヨ酒ヨ溺れ、兄弟ハ常ヨ囹圄ヨ出入し、姉妹ハ醜行ヨ身を汚せる一家族ありとせんヨ、若し其のうちヨ、一人の純潔ヨして心正しき處女ありて、荊棘の中の百合の花の如く、獨り美ハしと假定せよ。彼ハ其の家の罪を傷むこと實ヨ已れの罪ヨ於けるが如くあるべし。他人ハ之れヨ懸念せず、唯彼是と風説の種となすのみならん。然れども彼の處女ハ父母兄弟姉妹の罪惡の爲めヨ鎗もて心を

刺るゝが如く、其の苦痛喩へんよ物なし。彼ゝ家の罪惡を身よ背負ひしなり。基督の人類よ於ける地位ゝ之と大差わるとなし。主ゝ喜んで人間よ降り、吾らの骨の骨、肉の肉となり、其の感覺尤も鋭き中心とゝなりたまへり。主ゝその見聞せる罪惡の恥と責とをおのれの心胸よ聚めたまへり。汚行者ゝ之れを感せず、獨り基督ゝ之を感じたまへり。之がためよ、其の心痛み、其の胸裂け、おのがものとなりぬる他人の罪惡のためよ壓せられて死したまへるなり。ゲッセマヲ園千行の血の汗、カルバリ山上吾が神よ、吾が神よとの號泣ゝ、幾分か之を以て説明することを得べし。然れども吾等ゝ其の悲痛の底蘊を探り、其の秘義を解説することを得ざるあり。唯其の心を最も強く刺激し、最も甚だしく之を苦しめたるものゝ、世の罪なるを知る。聖書よ曰く、彼ゝ罪を知らず、たゞ我らが彼よ由り、神よ義とせられんとてわれらの爲めよ罪人とゝなれりと。

三

一　基督の苦難を受け賜へる結菓ゝ、福音の道よ於て首なる地位を占むる問題なり。茲よゝ僅かよ數言を以て之を略説せんのみ。

希伯來書よ曰く、我等の救の主ゝ、苦難よりて完き者となされたりと。又云く、彼ゝ其の受けたる苦よりて從順を學べりと。

此等ゝ實よ秘義よ屬する陳述なり。基督ゝ不完全なりしが故よ、完くせらるゝを要せしや。又不從順なりしを以て從順を學ぶの必要ありたるや。希伯來書の語ゝ決して基督の品性よ一點の缺ありとするものよあらず。只基督ゝ人よして人類の履歷を有し、人類の發育をなせる者なるが故よ、從順と完備との階梯を登らざるを得ず。基督ゝ其の一段毎よ毫も過失なく、其の昇るや常よ時を誤らず。完全なる品性を損ひしとなしと雖、又一段毎よ新らしき境よ進み、德も從順も更よ高く、又更よ廣き者とゝなりたるなり。

ゲッセマヲよて父よ成る可くば、此の杯を我より離らせ給へと祈れる

ん一段なり。漸くよして言ふべからざる平和を覺え、嗚呼我が父よ、若し此杯飲まずして我より離る可からずば、聖旨を爲し給へと祈れるゝ、其の次の一段なり。前の祈も、後の祈も、偖よ宜しきよ適ひたる者なれど、基督の鍛錬よ於てゝ、次第よ、進歩するものありしを見るべし。

基督ゝ苦難よ於て其の德を完ふせり。吾等靈魂上の進歩も亦斯くの如く、苦を以て之れを養ふの手段とす、若し苦難よ遇ひ、神の意旨と、已の意思と相衝突せるを感じたるとなくば、神の意思を有難く感ずること稀ならん。我等ゝ初め神の攝理を訝かしみ、心よ抗抵の念ありしも、漸くして耶蘇の如く我が心にあらず、聖旨を爲し給へと云ふよ至り、安心立命の秘密即ち茲よ在るを發見す、斯よ於て乎、凡ての理會よ超ゆる平和ゝ、我等の靈魂よ來るなり。重き枕よ就き、痛苦一方ならざる父母兄妹若しくゝ朋友が、神の鍛錬よりて愈〻忍耐柔順の德を養ひ、聖潔の心、平和の氣、瘦せたる面よ顯ゝれて得も言いれざる美を呈するを見れば、此れを以て最も馨ばしき戰捷とし其氣高き威嚴の前よ自ら襟を正すの心地せらるゝあらん。此等ゝ實よ只管よ立ちて待ち望む聖徒よてあるなり。

二　保羅の書翰中よ自ら苦難よ就て學び得し教訓を述べて云く、頌美べきかな神即ち我儕の主イエス、キリストの父、慈悲の父、すべての安慰を賜ふの神、我ゝ我儕が諸般の患難の中よ我儕を慰め給ふ。是我儕をして神の我儕を慰めたまふ安慰を以て、又もろ〳〵の患難よをる者を慰むることを得しめん爲あり。（後哥林一章、三、四）即ち保羅ゝ患難を受くるを以て喜びとなし之よりて患難よ居る者よ接するの道を學びたりき保羅の如きゝ能く道の奥妙を達觀したるものといふべし。難難ゝ汝を王よす、安慰を得るの道ゝ、患難の外よ一も是れあるとなし。今深き難みよ陷れる人より見れば曾て一たびも辛酸を嘗めたるとなき人の胸中より溢れ出づる慰めと、自ら困難よかゝりしとある人の温厚ある言との間よ

い自ら霄壌の差あるべし。故に坎坷苦痛の火爐中にあるものは、深く之れを心に領せよ、思ふに是れ我れをして人を慰むるてふ神の聖職を奉ずるに適當おらしむる鍛錬ならんと。耶蘇も斯くの如くにして、人を慰むるの術を學得し給へり。されば何人にてもあれ試みられしもの、誘いれしものい、皆彼れに往け、耶蘇い親しく之れを經驗して、其の隱避所を熟知し給へばなり。『蓋われらが荏弱を體恤こと能ざる祭司の長い、我儕に非ず彼い凡の事に我儕の如く誘いれたれど罪を犯さゝりき』

三　基督の患難を受け給ひし結菓い深くその救世主たるの事業に浸漸せり。基督い豫てより患難の來るを知り、之を人に告げ給ひき。即ち一粒の麥若し地に落て死ずい惟一にて存ん。もし死い多くの實を結ぶべしと云ひ、我れ若し地より擧げられなば、万民を引て我に就せんと云ひ、又モーセ野に蛇を擧げし如く、人の子も擧らるべし凡て之を信ずるもののみい滅ぶることなくして、永遠生命を受しめんが爲なりと云ひ給へり。

主の死するや、悉くその味方を失ひ、一人の弟子も信仰を保てるいなかりき。後、日を經て甦り給ふや、その信仰勃然として復興し、患難を受けたりし救世主たるの名譽此に煥發したり。

主の患難い人心を吸引する引力なり。誰か彼れの患難を見て、其限りなき愛、濁りなき他愛心、死を以て眞理と主義の爲めに盡くせし忠誠に感激せざるものあらんや、已に然り故に基督の受け給へる患難い人間に對して一大威力を有せるなり。

當に人間に力あるのみならず、又神に對しても、その力ありしなり。彼い我儕の罪の挽回の祭物なり第に我儕の爲のみならず偏く世の爲の挽回の祭物なり主已に死したまひたれば、我等又死するを要せず。神い基督をして、基督を受くるものに、すべて自由に罪の宥しを與へしめ給ふ。基督い自ら卑くしたまひたれば、神い之れを高く擧げ給へり。而して

今や神の右の手より座し、その腰より、陰府と死の鍵を帶び給へり。

第十一章　博愛者たる基督

馬太傳四章廿三、廿四
同　八章十六、十七
同　九章廿五、廿六
同　十章一、八
同　十一章四、五
同　十四章十三、十四、三十六
同　十五章三十—三十二
同　十九章二十一
同　廿一章十四
同　廿五章廿四—四十
同　廿六章八—十一

馬可傳六章五十四—五十六
同　十章二十一

路加傳十章十二—十七

約翰傳十三章二十九

第十一章　博愛者たる基督

博愛者（フヰランスロピスト）なる名は、基督よ適用するよりも、輕きよ過ぐる樣思はる。況んや此の名り世俗的の臭味を帶びたるをや。

世より不幸なる語もあるものなり。その通用せらるゝ間よ墮落して遂より固有の意味を失ふよ至る。慈善（チヤリテー）なる語りその一例なり。元來り愛といふ意味を有し、基督と一体となるとよりて起る最高等の愛を言ひ顯すよ適當の語たりしともありしなり。哥林多前書十三章り此の意味よよれるものよして長く基督教國よ於ける此語の用法の憑據たるべし。如何せん、斯の語り、此の名譽を失ひて墮落したるものゝ如し。而して今や慈善（チヤリテー）なる語り賑恤（しんじゅつ）の別名とりあれり。博愛なる語も之れよ等し、通用の間よ次第よ轉化し、今日よてり、靈性の利を計る事業より區別して肉体及び活計の爲めよする事業を指すとりなれり。されど元來の意

味い斯る狹隘のものゝあらずして、單に人を愛するとゝてありたるなり。

此の廣き意味による時い、此語を神に用ゐたると聖書に見ゆ。提多書に曰く、然ど我儕の救主なる神の慈と人を愛し給ふ愛の顯れし時かれ我等が行ひし所の義き功に由ず唯その矜恤に循ひ重生の洗と聖靈に由て新にすることを以て我儕を救へりと。茲に人を愛し給ふ愛といへるい、人間の肉体に關する神の愛にいあらずして、即ち靈に對する神の惠みを指せるなり。蓋し重生の洗と聖靈に由て新にすとといへるによりて明なればなり。

基督の愛に於けるも亦然りとなす。基督い先づ靈を救はんが爲めに艱み給ひたるにて、肉体の欠乏及び苦痛を救ふが如きい、之れを第二となし給へり。今靈の爲めにする事業い、何故肉の爲めにするもの〻如く、之れを博愛と稱せざる乎を理會するい容易にあらず。基督教的の眼孔より觀察すれば、靈の事決して肉に讓らず、否却て優れるものあるなり。而して何人も此の中に遙かに廣大なる恩惠を含めることを否拒せざるべし。乞ふ見よ、福音の傳いる處、海の内外を問いず、自然の勢として殘虐も、貧困も、無學も皆除き去らるゝことを。

博愛の業い單に人の生況を改進するに止まり、全く、靈性的の目的に關係なしとせば、博愛者の名い斷じて基督に當らざるなり。基督い、人間肉体の要用を深く察知し給へりと雖、又常に高尚なる靈の糧の次位に之を置き給へり。基督の愛い人たるものゝ全体即ち肉と靈との雙方に及べるなり。基督の神に對する愛、及び人に對する愛い二箇の情にいあらずして只一なり。基督い、人を愛す、その故い人い神の工に成れるもの、神の像に作られたるもの、神の愛し給ふものあるを以てなり。

人の中に神を見んと即ち人の中に基督を見んと欲するの念い博愛の業を刺激せずんばあらず。凡そ我名の爲めに斯の如き孩提の一人を

接る者い即ち我を接るおりとい、基督の自ら宣ひし言なり。我等が人の肉体に觸るゝい、是れ聖靈の宮殿として作られたる者に觸るゝなり。縱令ひ陋しく罪深き人にても、是れ又神の愛し給ふ者にして、救主い此の人の爲めに死し給ひ、又此人は能く基督の榮光の嗣たるを得べき人なり。人に對して此の心掛あらば寔に博愛の事なくてい止まざるべし。

二

自ら宗教家なりと稱するもの必らずしも實際的博愛の人にあらず。基督のサマリヤ人の譬喩い、善く之れを穿てるものといふべし。或る旅人強盜に遇ひ、打擲かれて頻死にされしが、親切に介抱をなせしい、祭司や、レビの人にあらずして、意外なるサマリヤの俗人なりき。歷史を繙けば此の類の例證頻々として見ゆ。門外漢たる人々が究民の救濟に汲々たるに、其の天職を帶びたる者にして却て袖手傍觀し、世の誹りを招きしも、少きにあらず。凡そ神を愛することと、人を愛することとい、時として兩立し難き樣に見ゆることあり。然れども耶蘇の世になし給へる大事業の一い、宗教と道德とを調和するにあり。基督い神を熱愛するが爲めに、人を疎略にすることを許し給はず。却て神を愛するものにして、初めて其の同胞を愛すべしといひ給へり。

斯の如く基督の結び合せ給ひし事を切り離せし者當代に是れあり。無神的の博愛い今の世に行はるゝ新工夫の一なり。神と、神たる人とを信せず、又靈なる永遠界の存ずることを信せず、然れども道德の總額い他人の爲めに已れを犧牲に供するにありとおす論者もあり。而して基督をその理想となし、基督の摸範我れを勵ませりと稱し乍ら、基督の助けをも假らず。基督の爲にもあらずして、只彼が人なるの故を以て之を愛せよと敎ふ。又人のために身を盡くし、心を竭くす可き理由い神に在らずして其人自らのうちに在りとなし、未來を設けず死を人生の最後となすも、今助けざれば、後亦如何ともするに由なしと思ふが故に、仁心の亡

滅する患あるとなしと稱ふるに至る。

若し夫れ斯る論者にして善く自克の生涯を送り、且つ罪惡と貧困との問題に救濟の策を施すを得るものならしめば、信者に宜しく彼等を勸奬してその企圖の成功を希ふべし。此の世に廣ければ、經驗に餘地あり。その心術に如何なるにもせよ、人に助を假さんとするものあらば、之れを辭するとなきに、實に今の世の有樣なり。而して己れに基督に反對すと信じ居る人の實際に、却つて基督の事業を助くるものあるとに、我等の往々にして認むる所なり。然れども根底より全然基督の主義に反對するものゝ企圖より多くの美果を收め得んことに到底望むべきことに非ざる可し。

人間に天賦として他愛心あること疑ひなし。之を利用すれば、驚くべき事業をもなしつべし。故に宗教を信せざる者が、却て時として、信者を慚死せしむる程の善行をなすことあり。此に人性中、一の强大なる勢力を

有するものあり、我等博愛心を以て之れを克服せざるべからず。即ち利己心是れなり。利己心に人間通有の本能にして、人をして己れの利益と幸福とを求めしめ、弱を制し、寡を抑えしむ。此の勢力に何人の胸にもその地位を占む。啻に一個人に此の精神あるのみにあらずして、社會も亦之れを有し、法律も習慣も皆之れを含み、世々にその毒を流し、恰も世の大權を握れるものに似たり。宜しく博愛を以て之れを征服せざるべからず。是れ容易の業にあらず。されど己にその必要ありとすれば、神の愛に基きて之れを天外に驅らざるべからず。

基督教に神と人との關係、及び靈魂の不滅を說きて大に人生を貴ときものとなし、眞實なる基督教信者に、その兄弟を虐待せば、罰を免るゝ能はずと信ぜしむるに至れり。然れども神を畏れし、未來を信ぜざると不可思議論者の如き者に至りては、眞正の博愛心を養成するの力大いに欠くる所ありと謂はざるべからず。

佛國革命よ先きだつこと數十年無神的博愛論なるもの起れり。當時の預言者等預言すらく、私慾亡び、殘虐暴戻その迹を絶ち、四海兄弟の平和時代必ず來らんと。何ぞ圖らん、その主義の實行せらるゝよ至りて、その結果い慘又慘、殘忍酷薄いふも愚かなる革命の戰爭となりて顯れ來らんとい。夫れ彼の雄辯よして且つ新信仰の高弟たるルーソーい、四海兄弟の主義を唱へながら、自ら子を擧ぐる毎よ常よ之れを育兒院よ送り己れの煩雜とその費用とを省きたり。革命い時勢當に然らざるを得ざる破壞的の事業を斷行せり。然れど是れ却て建設的の事業よ必要なる愛い、之れを人類以外よ求めざるを得ざる好説明よてありき。

方今基督の名を知らざる者の間よすら、基督教的の感情、次第よ燃え、他日稍、見るべきものあるよ至らんとす。而して人性の理よ通せるものい、若し基督教亡滅せば、不可思議論い何れの處より熾盛なる肉慾を制抑する光明を得るかと鞠問するなるべし。人自ら己れい無宗教者なりと信じ乍ら、尙は幾分か宗教心を抱けると往々よして之れ有り。されど若しその源流を斷たば、間もなく末流い涸渴すべし。水の上よ結べる氷い、其の水を取り去りたるのちも暫らくい溶解せざるを得べしといへどもその容積は次第よ減じ行き遂よは其の形を留めざるに至るべし。博愛主義の處理すべき世の疾苦患難素とより見聞するよ忍びざるものなり。人情は動もすれば之を厭棄して顧みること無きに至らんとす。近頃のことにてありき、倫敦東部貧民の叫ぶ聲漸く播りて全世界の注意を惹くに至らんとするや、西部の富人之れが爲めに奮起し、紈袴の子女東部の陋巷を探檢せり。されど余の聞く所によれば、此の事業已に殆んど廢り、貧民救濟の事業は、大半、從前の如く基督の賤しき友の手にのみ歸せり。若し精密に探檢したらんよは、人間の爲めのみあらず、又我等を贖ひ給ひし救主の爲めにせんとの心掛あるにあらずして、尙は能く滅亡衰廢よ至らざる博愛事業は蓋し希有のことならんと余は考ふるあり。

三

基督の博愛に於てその著しきもの二あり。

其の一は即ち貧しき者に施し給へると之れなり。こはいふまでもなく、基督の常になし給ふ所にして、彼のユダの將に基督を賣さんとするの夜、基督之れに告げて云く、爾の爲んとする事は速かに爲せと。而して弟子等は皆思へり、是れユダの金嚢を職れるを以てイエス彼れをして貧しき者に施さしむるならんと。此時その金嚢の中には果して充分の金ありしや否やは今より之を測定し難し。兎に角耶蘇は他日の計にとて、その大工たりし時に若干の金を貯蓄し給ひしならん。十二の弟子も亦幾許かの用意ありしならん。婦人の弟子にして寄附をなせしもありしあらん。然れども其の金嚢い常に豐かなりしみいあらず却て動もすれば欠乏を告げたり故に耶蘇の施しをなすい貧しきものより貧しき者に施すとよてありたれども、之れが爲めに未だ曾て施濟を廢し給ふとなかりしなり。

世によい博愛の危險を唱へ、之れに反對せんとする人あしとせず。されど耶蘇の例を如何せんとするや。只之れをなすにい、熟考の上にも熟考を要するはいふまでもなし。彼の乞食を以て職業とおす者に施しをおすは、啻に無益なるのみならず却て之れを害すること多く、その獨立心を損ふに至りては、啻に德と稱するを得ざるのみならず、寧ろ不德と稱せざるを得ず。然れども世には眞に憐れむに堪えたる貧民あり、博愛の事業に力を盡くす者の爲めに知らる。財に富める人は宜しく此の人を經てその慈善を利用せしむへし。されど若し自ら此の饑寒窟に足を運び、善くその實情を探りたらんには、眞正の貧人を發見すること難からず。饑寒窟は近きにあり、然れども其の內情は多く明ならず。之れを發見すること難しとせず。一たび愛心を以て此に入らば、探檢の事業は容易なるのみ。時としては清廉の君子にして或は疾病の爲めに或は一時その職を得

ざりしが爲めに、此に至り、之れに物を與ふる時は救濟し得べき人もあらん。或は幾多の轗軻と苦戰して老廢已に事を執る能はず、我等の之れを救ふは義の當に然るべきものもあるあらん。夫れ極貧の者の中にも亦神の嗣者あり。他年一日我等を救ふの地位に立つの日なきを保すべからず。

基督の博愛の第二は即ち病を療せしと之れなり、彼れは奇蹟に依りて之れを施し給ひたれば、人或は容易きとの如く思ふものあるべしと雖、亦我等の想像の外に出つるものあしとせず。或時一人の女、愈されんとして基督に觸れしに、女は知られざらんとを望みたれども、基督は之れを知り給へり。蓋し德の御身より出づるを感せしと云へはなり。亦其の人を愈すに方りては、深く同情同感の心を動かし、強く博愛の念を刺擊せられしと聖馬太が自ら我儕の恙を受われらの病を負といひし言によりて徵せらる。然れどもその之れをなすや、未だ曾て熱情禁ずる能はざるより發し來れるにあらざるなし。基督は家に在らんよりも、寧ろ群衆の間に立ち、誠心實意病めるを療し、不具なるを全くし、權力の言を傳へて靈魂の飢えたるを養ひ、喜樂の雨を注ぎて愁眉を開かしむるを其の本意となし給へり。父は一家の重荷にあらずして却て之れに麵包を供するものとなり、子い苦心を除かれて天地に歡喜し、母は病の爲めに奪はれし地位と職業とを回復し、一家謳歌して基督の德の洽きを讃美す。思ふに人を救ふには、之をして遂に自立の計を立てしむるに至るより善きはなし。基督のなし給へる所は即ち之れなり。

我等は勿論奇蹟を行ふ力あるものにあらず。然れども我等は又之れと似寄りたる働きをなし、耶蘇の在世の時代に在りしならば奇蹟同樣に人を驚かすべき事を行ふを得べし。

學術の力は即ちその一なり。夫れ基督の博愛と相似たるもの、熟練ある醫術を以て貧困愚昧の徒に施すが如くはなかるべし。今日の病院、施藥

院は、基督の醫療事業の繼嗣なり。異教の民に醫師を送りて靈肉の健全を得せしむるとは、基督の其の使徒を遣はし給へると宛も似たり。今や教會はその傳道をなすに、愈々熟練の看護人を使用するととなり、尤も貧しき者には及ぶ丈けの力を盡くし、少しもその報酬を貪らず、基督の肢体として基督に事ふるが爲めなりとて、最高の報酬を拂ふ者に對するよりも一層の懇切を表する醫師各國到る處に在り。

之れに加ふるに、尚は政治上の力なるものあり。以て人を救ひ世を益するを得ん。此の權力は古の信者の夢想する能はざる所にして、彼等は一切國家に何の權力をも有せざりしと雖、今の我らは然らず、已に政權を手に握れり。ウイルバーフヲースやシヤフツベリーのなせし所は、世の邪惡を絶ち、困究を救ふに當りて如何樣に政權を用ふべきかを示したるものなり。政權善く我等をして流れを清め、毒源を豫防せしむるものなり。されど基督教徒は今やその修行最中なり。之れを不潔なりとして

近づかざらんとする人もなきにあらず。されど政權は善をなすが爲めに神の我等に賜へる一大有力の機關なり。我等は博愛の事業をなすに方り、常に壓制の車輪の下にある犧牲を救ひ出すを以て滿足せず、更に進んで此の車輪の運轉を停止せざるべからず。博愛の義務は、世の末までも代るべからず。されど其の方法に至りては、適宜の處置あるべきと、基督がその弟子に種々の命を下し給ひしに徴して明かなり。基督がその弟子に命じ給ひし愛の精神を以て之を今日の同問題に適用する時は、自ら物足らぬ心地せらるべし。今日にありては他愛心の盛なる人々は豫防し得べき禍源をその儘に見捨て置き、苦痛已に迫りて初めて之を救ふが如きとをなさず。凡そ豫防は治療に優れり。而して人生の苦痛その大半は社會の組織を改良すれば、豫防し得べきと今日已に世人の熟知する所なり。故に今日の慈善は(その當を得たる場合に於て)その功廣く、その規摸大なりその苦難に陷りし原因は、或は過失、或は社會不整頓の罪、或は豫防し難き缺點等何れにせよ、その禍に陷れるものを救ふの勞を辭するとなきなり。……されど之れをなすに當りて只新約書に見ゆるものゝみを手本として、その以外に及ばざる時は、成功必ず半にも至らざるべし。今一病夫を診し、出來る丈けの手當てを盡くす時に當り、今日の慈善にては、その病原を質し、次に其療法を他の病人に活用し得べきや否や、亦豫めその危險を防ぐの法あるや否やを研究するなり。又一人の飢に瀕める者を救ふ時には、今日の慈善にては如何なる社會の組織の過ちの爲めに此の人の所得を乏しくし、優勝劣敗の道理には如何なる不正の點ありしか、教育の缺けたるが爲めに其の徳を乏しくし、且つ習慣を惡しく

せしかといふが如き諸問題を研究するなり。(Ecce Homo)

以上は只基督教主義の博愛の一班を示せるに過ぎず。而して基督の奇矯なる一語今や將に其の實あらんとす。云く誠に實に爾曹に告ん我を信ずる者は我行ところの事を行ん且此より大なる事を行べし蓋我父へ往ばなり

四

基督がその弟子に遺し給へる摸範の中にても、その確實なると博愛に過ぎたるものはあらず。耶蘇は慈善をなすに當りて十二人の弟子とその財産を合一し、一人をして之れを管理せしめぬ。人あり、基督の徒とならんと欲す。基督即ち之れに告げて云く、往て爾が所有を售て貧者に施せ、然れば天に於て財あらん。而して來り我に從へと。而して耶蘇は斯の類の場合に接しては、常に同一の命を與へ給ひしと知らる。耶蘇は醫療事業に於ても、同じく弟子と已れとを合一し給へり。即ち弟子を遣はさんとして宣はく病る者を醫し、癩病を潔くし、死たる者を甦らせ、鬼を逐出すことをせよ爾曹價なしに受たれば亦價なしに施すべしと。

中に就て尤も深く、我等に感動を與ふるものは、その末日審判の有樣を記述し給へる言なるべし。曰く、斯て王其の右に居る者に云はん。吾父に惠まるゝ者よ來りて創世以來なんぢらの爲に備られたる國を嗣蓋なんぢら我飢し時われに食せ渴しとき我に飲せ旅せし時われを宿らせ裸なりし時われに衣病る時我をみまひ獄に在し時我に就ればなり。左に居る者に宣ひし言葉之れと異なり。罰せらるべき者よ我を離れて惡魔と其使者の爲に備たる熄ざる火に入れ蓋なんぢら我飢し時われを宿らせず、裸なりし時われに衣せず、病また獄に在し時われを顧ざればなりと。

是れ即ち最後の點檢の時、信仰を審査するの標準なりと云ふの理を眞實に會得したるもの幾人かある。基督教國の習慣は果して尤も明了な

る斯の聖訓を遵奉せるものあるや如何。無論斯の道を踏んで主に從ふものなきよあらず。是れ即ち自克の道なりといへども、樂しみ自らその中にありて存す。蓋し貧民の破ら家を訪問ずるの途上よゝ、その摸範前例たりし聖足の跡あり。病み亦艱めるの者の身体よ觸るゝ、即ち主の手及び脇よ指を接するものなればあり。今は左る感じなくとも後ち必ず思ひ當るべし。然れども是れ果して一般の信者のおす所なるか。彼らゝ果して鰥寡孤獨と相親しめる乎。前の日施したりし銅錢の恐く銀貨よあらざりしを悔むの日、將に來らんとす。曾て貧民救助の醵金をば五月蠅きまでに我れに請求せし人ゝ反つて我が恩人なりしと思ふの日、將よ來らんとす。又富める者の食卓にて費せる百時間よりも、貧しき人の家にてすぐせし一時間を心よ留め置くとの大切なる時將よ來らんとす。基督云はずや、斯の如き孩提の一人を接る者ゝ即ち我を接るなりと。

第十二章　靈魂の教化者たる基督

馬太傳一章二十一
同　四章十八―二十二
同　九章十―十三
路加傳四章四十三
同　七章三十六―五十
同　十五章
同　十九章一―十。四十一、四十二
同　廿二章三十九―四十三
約翰傳二章二十三
同　三章
同　四章
同　七章三十、一、三十七
同　九章三十五―三十八
同　十章十一
同　十二章廿一、廿二

第十二章　靈魂の敎化者たる基督

一

南亞弗利加ある或金剛石採集場い下の如き手續きよて發見せられたるなりといふ。旅人あり、一日或谷間よ入り込み、或家の門前近く來りしよ、一童子ありて石を投げつゝ自ら樂しめり。偶その石の一箇、旅人の足下よ落ち來りければ、即ち之れを取り上げ、笑ひ乍ら投げ返へし遣らんどせし時、何物か光を發せしよぞ、打ち驚きてその手を控へぬ。是れ即ち金剛石よてありけり。彼の童子い普通の瓦礫と心得て玩ひつゝありしなり。此の人の目よ止まり、その價を見屆くるまでい、賤の男の足下よ踏み付けられ、車の輪よ碎かれたりしかり。

余い一念、靈魂の事よ及ぶ毎よ、常よ此の一話を思ひ出すなり。耶蘇の世よ降り給ひて、こを發見し給ふまでい、常よ前述の如き取り扱ひを受け

しよあらざるなからんや。邪惡の汚泥よ塗れし娼婦の靈魂！パリサイ人ゝ之れよ觸れて指の端だも汚すを好まざりき。幼兒の靈魂！學者ゝ幼兒よゝ靈魂ありや、なしやといふ樣なる議論を弄ひたりき。

多數の人の眼よ輕んぜらるゝと何物も靈魂の右よ出つるものあらじ。靈魂ゝ棄てられ否まれ、疎忽なる人の足下よ蹂躙せらるゝと、猶は未發見の時の金剛石よ同じ。新よ永遠より出でゝ此の世よ生れたる靈魂ありたりとて、大抵その家族ゝ有無相關せざるが如くよして、舊よ依り罪を犯し、毫もその惡習よ染まらんことを恐るゝとなきよ似たり。斯くて其の子長ずれば次第よ俗臭よ移り、益雜多なる社會の感化を受くるよ至り、世人がその靈魂を重んずるの念、殆んど之れなきものゝ如し。故よ彼等ゝ之れをして過ちよ陷らしめんことを憂慮せず、亦その高尚なる起源、及び嚴肅なる運命を左ほど意よ介することなし。靈魂若し何時までも發達せず、又ゝ刑罰よ應ずるの備へもなくて委棄せらるゝよ至るも、人多くゝ之れを顧みず、その存亡ゝ我關する所よあらずとてその存在をさへ忘却せんとす。

靈魂の知られざるとゝ、金剛石の亞弗利加殖民及びその兒童よ於けるが如くなるゝ世人の語氣よ於て往々之れを見るとあり。製造所よ傭ゝるゝ工夫、食事をなすの時よ當り、數を盡くして工場より出で來るを見れば、我等ゝ云ふ、此の工場にゝ何ぞ手の多きやと。然らば工夫ゝ手よして靈魂よゝあらざるなり。是れ肉体と勞働の力とゝ人性の全部を盡せるものといふよ同じ。倫敦東部の人民を團塊と呼ぶゝ常の事なり。彼の貧民ゝ團塊として數へらるゝのみよて、その蟻の如く、雲の如く溢れ出でたる計りなる千態万樣の群民を見てゝ、一々が皆神より來り、神よ往く靈を宿せるものよあらざるよ似たり。

我等若し此の時その人々が各、靈を有てるものなるを見るの力あらば、ゝ基督より之れを學び得たるなり。基督ゝ靈魂を泥中よ拾ひ、土足の

下より取り上げ、且つ云く、是れ金剛石ならずやと。嗚呼人若しその靈魂を失はゞ、全世界を得とも將た何の益あらんや。

人類は實に智慧も權力も皆万人に秀でたる豪傑の靈魂の存在と、その貴きを信ず。ソクラチスの靈魂を信じ、シーザルの靈魂を信ず。されど耶蘇は普通の靈魂即ち婦幼、否、稅吏、罪人の靈をすら之れを貴べよと敎へ給へり。是れ耶蘇蓋世の發明あり。耶蘇はアダムの子孫みな金剛石を有てるを認め給へり。乞兒の襤褸も耶蘇の眼より之れを蔽ふに由なく、その光ゝ蠻人の黑皮、兇者の罪惡をも貫きて顯然なり。靈魂は蒙昧と不義の深淵に沈み亡せしとあるゝ事實あれども、是れが爲めに却て基督の大御心を動かしたり。靈魂は沈み亡せぬ。故に基督をして之れを救ひ、之を試み、再び原との地位に挽き回へして光輝を逞ふせしめんとの願望を立てしめたり。醫師の心を動かすものゝ何人ぞや、健かなるものにあらず、身に患苦ある人なり患苦ある人の中にても、その助けを要すると

尤も大なる人なり。醫師ゝ之れが爲めに日夜を捨てず、千々に思ひを碎き、一日に三たび訪ひ試む。已にして病愈ゆる時ゝ、醫師の技術全勝を得たるなり。耶蘇がその感情と行を以て示し給へる所茲に在り。

されど靈魂の貴ふとしといふにゝ、機密のあるとあり。鐵窓に呻吟する窮賊、街頭に皷吹する乞兒も、その靈ゝ尙ほカリフヲルニヤの金塊、ゴルコンダの金剛石に優りて高貴なりとゝ果して眞か。その心底を叩く時ゝ世人多くゝ斯る斷言の何の意たるを解せざるべし。されど此の斷言をなせしゝ、曾て世に住ひ乍ら尙ほ永遠界に徜徉し、明に未然を察し、詳に靈魂の前途を知れる基督にてありき。

靈魂の價ゝ夫れ斯の如く貴し。基督の靈魂救濟の業に從事し給ひたる動機茲に在り。凡そ今も後も人を刺激し、靈魂の敎化に盡力せしむるものゝ此の信仰なり。靈魂ゝ身体財產よりも勝りて貴く、その一を救へば、希臘、羅馬の榮華よりも過ぎたる報酬を得べしとの信仰あるものにして、初

めて此の大任に當るべきなり。

此の外尙は一層大切なる一動機あり、天職といへると是れなり。靈魂の敎化者の心に神の業をなし、神の命を奉じて同胞人類にその義務を盡すものなりとの覺悟なかるべからず。

仁恤の精神は尊貴なる心なり。自克の生涯を送らんとする者の苦心に光輝を添ふるものなり。然れども遍く世人の用ふる所となる能はず、我等の苦心顯れて世人稍望みあらんとすれば、又忽ち水泡に歸し、その卑劣奸惡なること如何に力を盡せばとて到底徒勞なるべしとの嘆あらしむ。偶〻稀代の仁心を抱ける人ありて、その身を殺し、他を助くることありとも他人之れを當然のことと心得、或人知らざる爲して過ぎ、甚しきに至りて人敵視するに至る。我等何が爲めに斯くの左程自ら望みもせざる人に、己が天より受けたる賜を分たんと欲するにや。されど尙ほ憐れみ堪えざるの我等の手に及びも付かぬ病ある良心是れなり。我等或の

己れの天職を誤まりたることあらん。世の條理を分かぬまでに痛く濁りたり、而して之を矯正するの我等の任に堪へざる乎。之れぞ我等が事に茲に從ふに當りて他愛心よりも尙ほ切なる刺激によてあるなり。我等縱令ひ難きを避けんとすとも、神の命令のなかに之を許さゞるなり是れ神の事業なり。多數の靈魂の神の我等に之を托し給へり。末日の法庭に於て我等は其の責に任せざるを得ざるべし。

神の命を奉じて人に接したりし總ての預言者と使徒とは、皆此の刺激に驅かれたるなり。此の刺激は善く弱きを起たしめ、難に堪へしむ。預言者と使徒とは大抵各〻その危機に衝き當りて天職のある所を悟り自ら前途の方針を定めたり。此の刺激はモーセをして野にありて此の命を奉せしめ、一身を公共の事業に委ねて百難の中を驅け拔けしめたり。イザヤは異象を見て此の天職を感戴す。その後年の履歷一に此に胚胎す。保羅は之れが爲めに其の生涯を一轉せり。エレミヤは神の命、骨を刺す

劍の如く、身を燒く烈火の如くよ感じ、發奮その事業に着手したり。基督の生涯中、尤も强盛なる動機も之れよ外ならず、基督ハ之れによりてその生涯を運轉し、難に抗するの聲援と、失望に沈める時の慰藉を得たり。基督ハ已れの成せし事業を已れの事業ならずとするを躊躇せず。斷じて功を神よ歸せり。基督自ら之れを云へり。蓋し基督ハ一舉手一投足皆神の意を成就する者なりといふを以て其の慰藉となし給へり。されど基督ハ或危機に際會してその生涯を両分し、此よ於て乎初めて犧牲獻身の事業に着手し給へるにハあらず。此の天職は基督その人の經緯なり。人を愛するの念は神の性質なるが如く、又基督の天性なりき。人を教化するは基督の精神の第一の望みなりき。而して基督は已が言行を以て一に之れを神よ歸したれども、其の聖旨も全く同一にして別の意見ありしにあらず。我れと我父とは一なりとは即ち此の意なり。

三

余が敢て救世主に靈魂の教化者なる名を献げ奉りしものは、聖書に基けるなり。聖書に云く、智慧ある者は人を捕ふと。言ふこゝろは、迷へるを求むるは覺束なくも、又難き業なりとなり。此の業に當らんとするものは、智謀と熟練とを要す。靈魂は之れを救はざるべからず。之れを救はんと欲するものは、之れを救ふの方法を執らざるべからず。

耶蘇は自ら此の語を發し給ひしにあらず。されど同一の道理を暗示してその用法を告げ給ひぬ。耶蘇の弟子をしてその事業を分擔せしめんとし給ふや、我れに從へ、我れ爾曹をして人を漁るものとならしめんと宣へり。竿を執れる漁夫は、漁業をおすよ如何程天候と水理を心得如何程眼を鋭くし、手並を練るべきかを知る。基督の漁と宣へるは網を以てするとよでありしならん。されど是れ亦前者よ讓らざる經驗、機敏、智謀、忍耐を要するなり。

靈魂を漁するよハ、經驗、機敏、智謀忍耐の中、その一をも欠くべからず。耶

蘇い此の術を行ひ去完全の摸範なり。之れよ熟達するの最良法は基督のおせし跡を熟視するよあり。

一　耶蘇い奇蹟を使用して靈魂よ達するの踏石となし給へり。前章よ述べたる博愛慈仁の行ひいすべて基督の宿望たる高尚幽玄の目的よ進まんとする序文なり。勿論余い之れをその獨一の目的といふよいあらず。蓋し基督の奇蹟いその意味多端なれはあり。されど此は奇蹟の一目的なるにい相違なし。奇蹟い之れおくてい起り得ざる靈性的の事の端緒を解きたるものなり。譬へば約翰傳の九章よ已れの誰なるやを知らしめずして瞽目を愈せし條の如き是れあり。瞽目は喜悅に滿され、四方を馳せ廻りて未見の友を贊稱せり。而して耶蘇は道に之に遇ひ、主よ我れ信ずと絶叫して拜跪せし時まで、已れの誰なるやを告げ給いざりき。これ肉体を療ずは、靈魂の旨を療すの序文ありし明證なり。其他の無數の事例も亦同一の目的の爲めにせるものならざるべからず。而して若し奇蹟の効い單よ療されたる當人よ止まらずして亦その親族よまで及ぶものなることを記憶せば、之れが爲めよ福音よ耳を傾くるよ至りたる者の數如何よ多かりしやを知るを得ん。

博愛い我等が一層高尚なる事業をなすの踏み石となるべし。厚情親切い能く肺肝の戸を開く、此の戸開くれば依て以て救ひを注き込むを得べし。勿論兩者とも多少の危險なきよあらず、慈善い新よ敎よ入りし熱心なる人の眞正の人情を湮滅し又慈善を受けたる者の方よてもその報酬として僞善を粧ふとあればなり。さいへ、此等の危險を避くることは必用なると同時よ、此の主義い頗る大切なるものよして今や熱心なる基督信者い着々之れを採用してその事業を行ふよ至れり。靈魂を重するの念い往々よして肉体の重んずべきとよも思ひ當らしめ、且つ之れよよりてマリヤの濺ぎし香油の救主よ於けるが如く芳しき行ひを生するよ至るべし。

二　基督ハ迷へる者を求むるの一手段として説教を用ゐ給へり。次ニ説教者としての耶蘇てふ一章を置けるを以て、此ニハ之れを論ずるの要あし。只基督の説教ハ如何程の感化力を有し、如何ニ人心を收め得たるやを説くべし。基督ハ譬喩と説明を以て眞理を飾り給へり。勿論基督ハ此る華美やかなる衣服は眞理の實相ニあらざるとを熟知し給ひしなり。眞理ハ平易ニして明了なり。知者ハその飾りあき儘ニて之れを知らんとを望む。されば耶蘇の聽者ハ此の粧飾を被らざる眞理を聞くを欲せざりき。故ニ基督ハ最初先づ譬喩を用ゐ給ひたりといへども、一たび此の眞理ニ擒られその價を知りたらんニハ又衣服の何たるを論ぜずして必ず之れを愛玩するニ至るとを豫て信じ給ひしあり。

説教ハ人を神ニ至らしむる一大手段なり。靈魂を救ひ得させんとの願望ハ往々にして説教をなさんとの願望ニ伴ふて起ると決して怪むニ足らざる程あればなり。されど一の怪しむべきとハ美ハしく、樂しく已が天職を顯表して耶蘇のなせしが如く人を引き寄せんが爲めニ鞠躬説教ニ從事する人の稀なると是れなり

三　熱心迷へる者を救ハんとの願望ある人、皆悉く説教者とあるニあらざるハ無論あり。されど基督ハ説教ニ加ふるニ更ニ他の方法を以て し給へり。そハ説教よりも更ニ多くの人の摸倣するを得るものニして即ち會話是れなり。その摸範として見るべきものハニコデモとの會話、サマリアの婦人と井の側ニてあせる物語等ニして萬世の末までも靈魂を救ふニ用ゆべき摸範なり。以上の二例を并べて之れを較ぶれば、主が巧みニ機ニ應じてその談敵ニ對し、能くその談話の緒を捕へて却て已れの目ざせる方針ニ向ハしめ給ひし技量の程を見るを得べし。是れ容易き業ニハあらず。蓋し宗教的談話ハその自然ニ出でざるべからず。然らざれば功なくして害あり。されど此の術の貴ふとき、とハ比ふべきものもな

く、之れよ達せんとするよゝ如何なる困難も惜しからず。余ゝ斷乎として說教家よりゝ寧ろ談話家の必要なるを知る。說教は之れを聽くもの往々よしてその責任を讓り合ひ、已れゝその天職を受けたる當人よあらずとなすとあれども、會話ゝ一直線よその正鵠を射擊するものなり。されば會話よして有力適當ならんよゝ、知慮ある聽者ゝ至る處よ之れを割愛すべし。而してその訪づれし家々よ於てゝ、此人よりて宗教の眞体を知り得たりとて常よ喜ぶべく、設令ひ地よ於てゝその名遍く知られずとも、天の目より見れば、その足跡煌々として明かあるべし。されど耶蘇ゝ此の器械を使用するよ當りて、始終攻擊者の地位よ立ち給ひたるよゝあらず。主が靈魂の事よ關して談話をなし給ふや、大抵ゝ彼方よりその端緒を解けり。宗教に付て思ひ煩へる人ゝ主を尋ねたり。是れ蓋し彼等が主ゝ已等の摸索しつゝある道を知り給へりと感知したればなり。耶蘇の諸方を巡り給ふや恰も銹ある床を過ぎ行く磁石の如し。神聖なる生活の親和力ある靈魂は悉く集ひ寄りたり。今日の基督教社會よ於ても多少同樣の職を盡くすよ堪えたる人なしとせず。此の人々ゝ即ち生命の秘密を感得したる人といふべし。靈魂の幽玄なる經驗を閲歷せしものゝ確かに彼我の情實を洞察したるならん。艱めるものゝ必ず斯、る人の同情を求む。是れ實よ靈魂を救ゝんとするものゝ最上無比の特權なり。蓋し迷へるものを救ふよゝ、迷へるものゝ方より之れを求むる時ほど功驗の著しきと未だ是れあらざればなり。

四

本書の旨とする所ゝ基督の摸範を示すよあるを以て、自然の勢主の言行の摸倣し得べきものゝみを述べ來れり。されど我等の常よ記憶すべきゝ、主ゝ如何程我等よりも勝れ給ふかといふと是れなり。我等ゝ遠き後邊より蹣跚として辛ふじて主よ隨逐するを得べきのみ。主ゝ我等の及びも付かざる地よ達し給ひしと渺しとせざればなり。

今の論點に於ても亦然り。己上述べ來りし中に就て或點までは我等主に倣ふて靈魂を救ひ得ざるにあらず。主は今や我等の達し得ざる點に達し給へり。即ち主の來り給へるは啻に迷へるものを求めんとにはあらずして亦之れを救はんとてあり。主は迷へる羊を探し當てゝ之れを肩に載せ喜び勇みて歸り來りし牧羊者に已が身を比し給へり。我等は事僧越に似たりと雖その迷へる靈魂を尋ぬるとに於ては敢て之れを主に比せんと欲す。されど主の比例は是れよりも更に深遠なり。曰く、『善き牧羊者はその羊の爲めに生命を捐つ』と。主は罪人の跡を追ふて濁れる世を涉り給へり。我等亦之れをなし得ざるにあらず。されど主は一層遠くまでその跡を追ひ給へり。即ち降りて陰府の門に至り力强き者の手より餌を奪ひ取り給へり。主は超自然界に入りて我等の爲めに勝ち、我等の爲めに贖ひをなし、我等の爲めに永在の門を開き給へり。此等の顚末に就ては、我等の知る所眞に朧ろげなり。蓋し是れ皆我等の目擊せざりし場所に於ておし給ひし業なるを以てなり。只我等の知る所は是れ皆我等の想像し能はざる程に悲哀的にして且つ嚴肅なりしといふと是れのみ。その我等の窺ひ得べき彰著なる一例は、人類に代りて肉を割き、血を流せしゴルゴタ是れなり、

此に至りては我等之れを摸せんとするよりは、寧ろ拜跪して畏敬せずんばあらず。されど此にも亦此の術に達せんとするものは須らく學ばざるべからざる教訓あり。人若し神を動かすの力なければ、人に對しても亦力なし。勝利は人に說くの間に獲らるゝが如くなりと雖、その實は已に之れを人に代り、心を痛め切に神に祈りたるの地に於て得置かざるべからず。此の地は、耶穌にありては即ち苦痛と死の地にてありき。苦痛もなく、犧牲もなくては靈魂は救はるべきにあらず。保羅は基督がその身体たる教會の爲めに苦しみ給ひたる足らざる點を補へりと云へり。世を贖ふの事業に於て基督とその喜びを偕にせんとする者は、先づ

初めよ基督とその苦しみを偕よせざるべからず。

五

靈魂を救ふの術困難よして且つ苦痛を免かれざるものならしめば、その報酬も亦隨つて大あり。余い或有名なる畫工を知れり。此の人い肖像を畫きつゝ今や此の一點こそ全体の畫の巧拙を決すべき大切なる一髪の危機なれといふ時よ際すれば、激昂の餘り號泣して伏し倒れ、手を揉み、地上を這ひ廻れり。されどその危機も過ぎ去りて眞よ迫れる肖像の布上よ現れたるを見ていい、欣喜措く所を知らざりき。これ今までい跡方もなかりし布上よ發達して次第よ生命あるが如き美靈なる肖像を見ていい、自ら奇異の感なくんばあらず。されど、靈魂の死より生よ移り、進んで永遠の日光中よ入ると猶ほ堅く閉ぢて見る影もなき繭より羽を延ばす蠶よ宛も似たるよ比すればその優れること孰れぞや。

路加傳十五章よ妙喩あり、牧羊者その友を集めて云く、我と共よ喜べ我うしなへる羊を獲たれば也と放蕩なる季子の父云く我儕食して樂まんと。基督は自ら此の喜びを説明して宣はくわれ爾曹よ告ん此の如く一人の罪ある人悔改めあば神の使の前よ喜あるべしと。神の使の面に現いるゝ喜びい是れ眞よ神の使の主たるものゝ喜びの反射のみ。神の使いその主の面を注視りて之れをその面よ再演するなり。

基督の世よ在せし時、その御意よ於て此の聖き情感を起し給ひしと、我等少あくともその一例を確認することを得るなり。基督いサマリヤの惡しき婦人を導びきて神よ輸し、聖きよ至らしめたる時、弟子等食物を得て市より歸り來り、即ち云く、食し給へとされど主い食ふ能いざりき。蓋しその胸い歡喜の爲めよ滿されたればなり。而して之れよ答へて云く、我よ爾曹の知ざる食物ありと言ひ終りて彼の婦人が更よ多くの靈魂を誘ひ來らんが爲めよ行きたる市を望み語調を續で云く、なんぢら穫時よなるよい猶四ケ月ありと云ずや我なんぢらよ告ん目を擧て觀よ

ハや田ハ熟て穫時よあれりと。耶蘇が空しくその望みを抱て、見す〳〵多くの霊魂を滅びよ至らしめ、市を望んで泣き給ひたるも、又その一例なりといふべし。

此、る高尚なる情感ハすべて多少霊魂の救ひよ従事するものゝ有する所あり。而して此世よハ之れよも優りて貴とき情感あるとなし。是れ天より直ちよ感得せる特許状なり。蓋し如何程卑しき傳道師よても眞よその心よ人の罪を痛み、その救いるゝを喜ぶものハ、救世主が苦痛を犯し、永遠の神の聖意より波及し來れる情感を應分よ感知したるものなればあり。

第十三章　説教者たる基督

馬太傳四章十六、二三—二五
同　五章—七章
同　九章四、十三、廿五—三十八
同　十章七、十九、二十、二十七
同　十三章
同　十六章十四

馬可傳一章廿八、廿九
同　二章二
同　四章廿三
同　六章一—六

路加傳四章十六—廿二
同　五章十七
同　七章十六
同　八章一—八
同　十一章二十七、廿八

約翰傳三章三十四
同　七章十四—十六、廿六、四十、四十五、四十六
同　八章一、二

第十三章　說教者たる基督

一

我等若し僥倖を得て、一生の間よ、一両度も稀代なる雄辨家の演說を聽くとあらば、死よ至る迄此事を口よするおらん。又若し我等をして始めて宗教の眞理を開悟せしめたる說教者を心よ記したらんよは、此の人の肖像ハ絶えず我が記憶よ鎭座するなるべし。果して然らば人の述べ得ざる所を述べ給へる耶蘇の我等よ於ける關係は如何。山の上の說教の如き、放蕩息子の譬喩の如き、始めてその聖唇を漏れ來りたるを聞きし者の感如何。

耶蘇は三十年の間、口を噤み給へり。此の間思想と確信の清泉をその心よ湛え、一たび樋口を切りて放つよ當りてや、凄しき勢よて之れを吐き出し給へり。耶蘇が安息日よ會堂よて說教し給ひしハ、その住地なるナ

ザレ及びカペナウンに於てせしものをその矯矢となす。繼で近在近郷にその手を延ばし給へり。耶蘇い安息日と、會堂と、常例の禮拜時間のみにて、その熱心を漏らすに充分ならず、會堂はいふまでもなく、街頭、路傍に立ちて説教し、山の陰、海の岸、天然の殿堂に有りて道を傳へ、一日も怠り給ふことなかりき。

聽者の熱心も敢て耶蘇に讓らざりき。耶蘇の傳道に着手し給ふや、その聲譽頓にスリヤ全土に廣がり、聽衆西より東より打ち集ひぬ。爾後無數の群民その跡を追ふて至り、時としては互ひに蹈み合ふまでの群集なりしとい、聖書に見ゆるが如し。耶蘇疲勞の余り靜けき地に退かんとし給ふことあるも、彼等容易くい之れを許さず、又暫し群集を離れ給ふことあれば、首を延ばして、その歸りを待てり。

耶蘇に聞かんとて集まりしものは、貴賤の別なかりき衆庶に喜ばるゝの説教家い、才知あるものに疎んぜられ、才知ある少數の人を滿足せし、むるものは、一般の人々の意を得る能はざること、その例尠からず。されど耶蘇の膝下にもガリラヤ、ユダヤ、エルサレムの諸方より出で來りしパリサイの人も、律法の學者も同じく來り集まり又一方に於てい、普通の人民何れも喜んでその説に耳を傾け、世人に卑しめられ會堂や説教に縁を絶れたる人さへ、屢公けの集會に足を運びぬ聖書に曰く、さて稅吏と罪ある者どもイエスに聽んとて近よれりと。一般の人をして斯程までに熱心ならしめたる秘訣い何處にありや、古人云く演説家はその口より黄金の鎖を出して人を引くの術を行ふと。耶蘇がすべての人を引き寄するの鎖い何物にてありしや。

二

其國君しくい隣國の宗教的生活及び説教の標準無下に卑しき時い、權威を以て道を宣べ傳ふる役者之れが爲めに却て人目を聳かさしむべし。黑の中にありていい白い別けて目に立つものなり。

耶蘇の說教家と成り給ひし時よはガリラヤの全土恰も深夜の光景よ掩はれたりき。此の地の住人、聖徒馬太い豫言の言を引照してその相違を記して云く此等の幽暗よをる民い大なる光をみ死地と死蔭よ坐する者の上よ光いでたり。之れと等しく此の新說教家の說教を聞きし者の下せし最初の批評い、耶蘇と舊來の諸教師との間よ存する相違より起る驚嘆の辭よてありき。聖書よ云く、人々その教を驚き合り蓋學者の如ならず權威を有る者の如く教たまへば也と。

舊來の諸教師とい所謂學者の輩よして、力なき演說を會堂よ於てなしたりき。されど幾分か彼等相互の間よ、相違おくんばあらず。學者として悉く無智の族よあらず、只その全体よりいふ時い、國民の心を支配する大任を帶びたるものゝ尤も勢ひなく、生命おき人々よてありしならん。猶太の文籍を蒐集せし『タルムド』と稱する一書は今日にも傳はり、當時實よ英語よ轉譯中なるが、猶太國の風教の一班を覗ふに足る。而して此書を閲讀せしものゝ言によれば、乾燥無味他よその類おしといふ。空氣は汚れ、肺い立ち昇る塵埃の爲めに窒息せられん計りなる粗木造りの際涯もおき廊下を歩するを以て、僅かに此の書を讀むよ譬ふべきなり。

猶太人の耶蘇を批評する言は恰も是れその教師等の欠點に的中したるものあり。皆云く、耶蘇は權威を以て教へ、學者の如くならずと。然らば即ち學者等は權威なくして教えたるなり是れ即ちタルムド書類の特質よてあるなり。彼等教師の中にい、未だ曾て一人として、恰も已れ自ら神と相親しみ已が眼を以て靈おる世界を觀たるものゝ如くに道を講せしものは是れあらず。彼等は前人の糟粕を嘗め、之れを判斷の標據となし、互ひに相憑賴して獨立の見識なし。此る說教といへども一時は世よ行いれ又自ら正統派の尊號を貪りたりといへども、寧ろ惡むべきの甚しきものとす。彼等の語氣よよれば、神い數百年の昔し聖書の時代よ於て此世に在したれども、今や即ち言はず、行ざるが如し。又神よあるの

喜悦、人を宥すの幸福、靈に滿さるゝとその他精神上の高尚ある經驗は聖書中の聖徒等の實驗したる所なりといへども、近代に至りては望んで得べからざるが如し。此に於てか聖書は化して神を幽閉せる牢獄となり、又靈なる生活を古器物の如くに貯藏せる博物館となり了れり。之れに反して耶蘇に聞かんとて來りしものは、心中、耶蘇は靈なる世界と密接し且つ耶蘇は已が見且つ感せし新聞を心に說き示すものなりと感じたり。主は前人の糟粕を嘗めて誇り顏に人を敎ふる迂腐なる註解者にはあらず。主の言は恰も最と高き處より今來着せし者の如く否尊ろ最と高き處よりして耶蘇が何を述ぶるかを御覽し給ふ者の言の如くなりしなり。耶蘇は學者にあらずして『主かくいへり』との語を口にするを得たる豫言者にてありき。

されば基督の聲名、ダンよりデルセにひろがり、人々は熱心をその面に現はしつゝ大なる預言者われらの中に興ると語り合へり。於此乎收羊者、その羊を、農夫はその葡萄畑を、漁夫はその網を捨て置き、新說敎家の下に走せ集れり。蓋し衆人い天外より來る使命の必要を感じ、且つ自ら一種本能的の作用を以て眞實の聲を認定するを得たればあり。

三

說敎家の人品は時としてその說敎の上に非常なる力を添ふることあり。只その人の說敎集を讀みしのみにて、未だその說敎を實地に聞きしことなき者い、時として之れを聽きしものゝ爲めに、その想像の實際の大あるに及はざるを笑はるゝことあり。大講談家と稱せらるゝ人の遺稿を出版して却て世人に失望を與へ後世の子孫をして妙所果して何れにあるかを疑はしむること余り珍らしからず。妙所い實にその人にあり、その人物の特異なる所にあり、その容貌の嚴かある所にあり、その燃ふるが如き熱心にあり、その道德的の勢力にあり。

されど印刷せる耶蘇の言い、人をしてその望みを失はしむといふは不

可なり。否その莊重にして創意に富めると讀むものをして欽仰止む能いざらしむ。されど基督の聽者が下せし批評より容易く推定せられ得るが如く說敎者の人品の雄辨決してその說敎の雄辨と相讓ることなきなり。

我等い實に耶蘇の相好の如何を詳ならず、その容貌は一見人をして渴仰と禁へざらしめしか。その聲すゝやかにして且つ快活なりしか。我等之れを知らず。而して今日と行はるゝ種々の傳說い未だ信を置くと足るものなし。但し我等は種々の點に於て、基督がその聽者に及ぼしたる感化の性質を認知するものあり。

猶太の說敎者と稱するものは、數百年の久しき腐儒賣僧の類に過きざりしといへども、その常と世と對して傲然たりし傳說の一は、昔し上帝の大辨論家としてその聲を全國と轟かし、國民と拔くべからざる特性を印象したる人々を記憶すると是れなり。而して耶蘇の傳道と着手するや、預言者新たと彼れと憑りて現はれたりとの風評頓と世人の是認を受け其の談論い實と預言者の一人と異ならずと云ひ觸らすと至れり。

衆人の想像い之れと止まらざりき。即ち古への或預言者死より甦り、耶蘇とよりて更とその前業と取り掛らんとすと確信するものあると至れり。此る臆想を逞ふする中と、自ら二派を生じ各自その意と隨ひ、二人の預言者を撰ひ來りて之れを耶蘇と擬したり。所謂二人とはエレミヤとエリヤ是れなり。或者は云く彼れはエレミヤなりと。或者い曰く彼れいエリヤなりと。

抑も此の二人い何れも大なる預言者として、恐らくい衆目見て以て預言者中の最大の者とあせしならん。而して之れを以て耶蘇と擬す、その意、知るべきのみ。されどエリヤとエレミヤといその爲人全く相反し、兩者の性質を一人として共有することい、到底出來べきとこい見へざりき。

エレミヤい温柔よして多感の預言者ありき、同胞國民の不幸を見ていの間よ類似の點を發見せしものい、敢て怪しとするに足らず、蓋し基督の情深き人なるとい一見自ら明なりしを以てなり。山の上の說教い貧しきもの、哀しむもの、苦しめらるゝ者よ同情を表するの言を以てその緒を解けり。されど聽者の中よも知慮あき族ありて耶蘇い斯る人々を憐れみ、之れを救ふの勞を執り給ふべしと思ひしも無理ならぬとなり。耶蘇は貴賤を撰ばず言を掛け給ひしと雖、貧しき者よ福音を宣べ傳ふると是れその誇りとせし所なりき。學者の輩い之れよ異なり、富める人よ媚び知慧ある聽者を貪ぼり平民よ至りては措て顧みず。之をして貴賤共よ同格同等の靈魂を有すと悟らしめたるい獨り耶蘇あるのみ。耶蘇は多くの人の群がれるを見ては心に一種いふべからざるの感を發し又エレミヤの如く篤くその國及びその國民を愛し、稅吏や娼婦にすらそのアブラハムの裔なるの故を以て同感極めて深かりき。

エリヤはその性質徹頭徹尾エレミヤに反對ありき。その性、傲岸よして王者を面責し、獨立獨歩少しも世よ媚ぶるとなかりき。人若しエレミヤの風采あらん乎、即ちエリヤの風采あると殆んど難きよ似たり。然るよ衆人は耶蘇の中にエレミヤを發見せり。而して是れ誤謬なる乎否然らず。夫れ耶蘇を以て只柔和温良の人なりとするは全く耶蘇を知らざるものゝ言あり。耶蘇の言の嚴酷なるとエリヤがアハブを責めしよ讓らざるもの二三よ下らず、況んや惡を罵りて憚る所なきはその權威の一要素なるをやそのパリサイ徒に對して少しも假借する所なかりし樣は決して普通の議論家に比類を見るべからざるなり。

その故如何、蓋し耶蘇は兩個の特質を具へ給へり。その温柔と嚴酷は共に同根より發したるものなりしあり。耶蘇は極めて貧しき人よ接するも之れを人として敬ひ給ひ、而して極めて富める人よ遇ふとあるも敢

て人以上の價値を與へ給はざりき。ラザロの襤褸も基督の眼より靈魂の尊嚴を包ひに由なく、富且傲たる人の紫衣も基督の眼を味ますよ足らざりき。基督は人の尊卑、榮辱、喜憂を知り給ふ。人若し基督よ遇はゞ、その人物高く已れの上よ聳え給へども、尚ほ自ら謙りて殘る方なき同情同感を表し給ふとを感せずんばあらざるなり。

四

説教家にして辨論の法則を練習せざるものは思ふに一般の人心よ深き感動を與ふると難し。更らよ此の事實を有り体よ云はゞ眞正なる神人間の使者は能く吸引し、能く收攬するの力ある辭を以てその使命を全ふせざるべからず。初心の説教者は、之れを缺くと多し。此輩は謂へらく、若し好材料だよありたらんよは、之れを述ぶるの方法は問はずして可なりと。是れ彼の來客に饗する珍榮佳魚だにあらば、その料理の方法は問はずして可なりと思へる細君に相似たりといふべし。

耶蘇の説教の人の心耳を聳動したるは大にその体裁の優美あるによれり。普通の人にありては彼處此處に散在する緊要なる金玉の妙句を記憶するよ難きを覺えずといへども、長大なる論文に至りては然る能はざると、その常なり。而して耶蘇の言は此の需用を充たすに似たり。措辭簡端明了にして之れを記憶するに易く、而も一々深遠なる意味を有せざるはなく、咀嚼愈、精しければ味愈、美なり。人あり清冽なる水に臨み底の見ゆるよ迷されて直ちよ之れを淺しとなし、杖を下して水底の石を探らんとすれば、何ぞ圖らん猶ほ達せざるもの數尋ならんとは。抑も基督の聖言は此の水の如くにてあるなり。

されど耶蘇の辨論は頗る通俗の性質を帶び之れを飾るに譬喩を以てし給ひたり。演説の妙は一に此に在り。心靈界の作者と物質界の作者は、共よ同一の上帝なるを以て、即ち創造の時に於て、若し利用せば万有は悉く心靈界の眞理を反射する明鏡となすよ具へ給へり。且つ我等も亦

物の理を解すると、此の方法に於てするを尤も妙なりとす。万有は尚ほ幾万の明鏡を有し以て心霊界の眞理を顯はさんとす。後世大家の活用を待つこと久し。

基督は眞理を説明するに方りて常に此の法を用ゐ、當時猶太の風物を知らんと欲せば、その言によりて歴史家に優れる考證を獲つべし。基督在世の頃に於けるガリラヤなる猶太人の風俗は、下万世までも明かに知られ幻灯に依りて一國の山水、家内の狀態、都市の風俗を詳かに目擊し得るに異ならず。我等は猶太人の杯を有し、皿を有し、行灯を有し、燭臺を有したるを知る。又婢僕をして粉を磨き酵母を加へ、之れを醗酵せしめたるを知る。其の一家の母は、古衣を綴り、父は酒を皮甕に藏めしとも推して知らるべく、その門前には牝鶏雛を集めて翼の下に之れを隱し、街頭には童兒冠婚喪祭の禮に擬して遊び戯れしとも明かなり。野外に出づれバソロモンとその榮華を爭ふ美はしき百合花播きし種を啄む烏枝に巣くへる鳥あり。鳩、燕、狗、豚、無花菓樹、荆棘もこれありしとと知らる。高く天を仰げバ南風に漂はさるゝ雲、明朝の快晴を約する夕燻、天を快奔する電光あり。葡萄畑には物見と酒搾あり。田圃は妙なる春色を以て之れを飾り、秋に至れバ、色つける田の面の遠近に農夫、牧獲に忙はしく彼方の牧場には、羊の一群あり、其の一頭だも影を隱せるを見ては、山野の嫌ひなく尋ね求むる牧羊者あり、宮に祈りをなすパリサイ人や税吏、エリコに至るの途上なる祭司、レビ、サマリヤ人。日々の宴會に費を知らざる富み且傲れる人、犬に腥物を舐らするラザロ等髣髴として我等の眼前にあり。是等の光景い猶太人の見慣れたるものなりといいへ、耶蘇の説教を聞きたる時にい、更に新しき感覺を與へしなり。蓋し常に見なれていよそ目に見て心なく打ち過ぎしも一たび其の樣を畫に寫されしを見ていはじめての樣に愛でいつくしむい人情なれバなり。是れ耶蘇がその聽者の心に聖言を注ぎ入れたしと

の熱愛と熱慮とより出でたるものなれば、なほ一の道理あり。説教者の心深く思ひを眞理に籠め、切に之れを喜ぶ時は、譬喩の電光自ら閃き起るものなり。冷淡なる心を以て或る問題を研究する時は、平々凡々たる文章を讀むの心地せらるゝことあるも熱心加はり來れば明了、活潑、光焔萬丈の思ひなくんばあらず。その感動深く、その印象、明確なる時は華麗なる肖像斬新なる譬喩、躍然として聽者の心に生じ、何時までも消え亡するとなかるべし。

五

説教の体裁原とより大切なりといへども、その材料に至りては更に大切なり。体裁は貨幣に於ける印影の如し。その原質は金屬ならざるべからず。その金屬とは何ぞや、金か、銀か、將た銅か。質實なるべき乎、浮華なるべき乎、是れ甚だ大切なる問題なり。

説教の材料の取るに足らざると、未だ猶太の學者より甚しきものは是れあらず。『タルムド』の書類は即ちその證なり。その所論の浮淺なること殆んど嗤ふに堪えたり。學者等の宗教は單に儀式のみ、その説教は十分の九まで儀式を説けり。祭文の長短、禁食の日限、納金の種類、百一の汚れ、その他此の類の細行末節を以て拙なき説教の材料とはなしぬ。此時以來、講壇をして地平線下に沈没せしめたること歴史上に頻々として見ゆ。英國に於ては、宗教改革の前に、修道者の説教、基督時代の學者の説教にも劣れる有樣とおり、その卑陋膚淺殆んど聞くに堪えず。獨逸に於ても亦然り。前世紀に於て偏理説の弊尤も極まれる時講壇は殆んど墮落の極點に達したり。是れ蓋し必然の勢ひなり。説教者の精神漸く冷淡となる時は、知らず〳〵その中央點を離れて周圍にさまよひ出で、遂には周圍をさへ踏み外すに至るなり。

勿論基督の説教の原質は逐一枚擧すべくもあらず。此には只その材料尤も謹嚴なる又尤も生氣ありしといふを以て滿足すべし。耶蘇の神を説

くや、聽者をしてその肉眼を以て明かに神を見、少しも曖昧疑惑の廉を殘さゞるの感あらしめたり。又その迷へる羊、又い放蕩なる男子の譬喩を述べ給ふや天の御門明け放たれて憐れみある神の心臓の皷動を見たりとの思ひあらしめたり。凡そ基督の説教を聞くものは其時初めて自己と人類とを覺知し、各人皆其胸より世界よりも貴ふときものを藏せるとを悟り、且つ泡沫夢現にも似たる此の世は消長浮沈天の高きよりも昇り、陰府の深きにも降るの應報と相伴へることを知らしめたり。耶蘇の永在を説くや、今までは漠然たる想像より過ぎざりし生命と靈性の不朽を充分に明瞭ならしめ、聽く者をして幕を撤して未來の眞相を窺ふを得せしめたり。

耶蘇の後へに從へる群集い、耶蘇の口に轡を食ましめ、充分に説教を終へしめざりしとは、敢て怪しむべきとよいあらず。彼等は人類なるが故に此の世の慾に眼昧みたりと雖、又深く其の胸底を推せゞ各自此の世のものにはあらず、此の世の智識い如何ほど趣味深しとも、未來に關する問題に至りてい、人間精神の根抵を攪動するものなることを承知し居たるなり。我れ何處より來りしか。我れい何物ぞや。我れい何處に往かんとするや。説教をして若し此の諸問に答を與ふる能はずんゞ、教會を閉づるも可なり。ガリラヤの山邊に呼應せる聲と如何にも解し易く此の秘義を談する聲とい我等大なる白き御座より聞くの日までい之を聞くと能いざるべし。されど耶蘇の聲に發したる心情と精神とい、斷乎として滅せず。今日も尚ほ昔時と同じく潑剌燦爛たり。説教者の辨舌若し永在眞理の正鵠に中るときは、是れ即ち基督の功績なり。説教者若し諸君をして目に見、手に觸るゝ世界の外に更に現實の世界あるとを感せしめんか。説教者若し諸君の心を維ぎ止め、諸君の肺肝に觸れ、諸君の仰望を警醒し、諸君の良心を呼び起さんか。すべて是れ基督が諸君を抱き、その愛を諸君に注ぎ、且つ諸君を救はんとし給ふとよてあるなり。是

くや、聽者をしてその肉眼を以て明かに神を見、少しも曖昧疑惑の廉を殘さゞるの感あらしめたり。又その迷へる羊、又い放蕩なる男子の譬喩を述べ給ふや天の御門明け放たれて憐れみある神の心臟の鼓動を見たりとの思ひあらしめたり。凡そ基督の說教を聞くものは其時初めて自己と人類とを覺知し、各人皆其胸よ世界よりも貴ふときものを藏せるとを悟り、且つ泡沫夢現にも似たる此の世は消長浮沈天の高きよりも昇り、陰府の深きにも降るの應報と相伴へるとを知らしめたり。耶蘇の永在を說くや、今までは漠然たる想像よ過ぎざりし生命と靈性の不朽を充分よ明瞭ならしめ、聽く者をして幕を撤して未來の眞相を窺ふを得せしめたり。

耶蘇の後へに從へる群集い、耶蘇の口に轡を食ましめ、充分よ說教を終へしめざりしとは、敢て怪しむべきとよいわらず。彼等は人類なるが故に此の世の慾よ眼昧みたりと雖、又深く其の胸底を推せゞ各自此の世のものにはあらず、此の世の智識い如何ほど趣味深しとも、未來に關する問題よ至りてい、人間精神の根抵を攪動するものなることを承知し居たるなり。我れ何處より來りしか。我れい何物ぞや。我れい何處に往かんとするや。說教よして若し此の諸問よ答を與ふる能はずんゞ、教會を閉づるも可なり。ガリラヤの山邊に呼應せる聲と如何にも解し易く此の秘義を談する聲とい我等大なる白き御座より聞くの日までい之を聞くと能いざるべし。されど耶蘇の聲よ發したる心情と精神とい、斷乎として滅せず。今日も尙ほ昔時と同じく潑剌燦爛たり。說教者の辨舌若し永在眞理の正鵠に中るときは、是れ即ち基督の功績なり。說教者若し諸君をして目よ見、手よ觸るゝ世界の外よ更よ現實の世界あるとを感せしめんか。說教者若し諸君の心を維ぎ止め、諸君の肺肝よ觸れ、諸君の仰望を警醒し、諸君の良心を呼び起さんか。すべて是れ基督が諸君を抱き、その愛を諸君よ注ぎ、且つ諸君を救はんとし給ふとよてあるなり。『是

故に我儕召れてキリストの使者となれり即ち神われらに託あんぢらを勸給ふが如し我儕キリストに代て爾曹が神に和かんとを爾曹に求ふ』

第十四章　教師としての基督

馬太傳四章十八、十九
同　九章九、十四―十七
同　十章
同　十二章一―三、四十九
同　十三章十、十一、十六―卅六
同　十五章十五、十六、廿三、廿四、廿二、卅六
同　十六章五―二十八
同　十七章
同　十八章一―三、廿一、廿二
同　十九章十三―三十
同　二十章十七―十九、二十―廿八
同　廿六章廿一、廿二、廿六―卅六、五十六
同　廿八章七、十、十六―二十

馬可傳三章一
同　四章三十四
同　六章三十―三十二
同　九章三十五―四十一
同　十六章七
路加傳九章五十四―五十六
同　十章一―十七
同　十一章一
同　廿四章三十六―五十一
約翰傳二章十一、廿二
同　四章二
同　十三章―十七章

第十四章　教師としての基督

一

教師の本領は說教者よりもその區域稍狹隘なり。說教者は群集よ語る。教師はその注意を或る少數の人に集むるなり。耶蘇の說教をなすや聽衆、千を以て數ふべし。而して教師の地位に立ち給ふ時にハ、對手ハ僅か十二人よ過ぎず。されど教師としての基督ハ、說教者としての基督とその事業の結果、思ふに相匹敵せしならん。

教師職は基督以前に多くの有名なる人々の占めたる地位にてありき、希臘の哲學者ソクラチス、プラトー、アリストートル及びその他の有名なる人々のその弟子よ於ける關係ハ、即ち耶蘇のその弟子に於ける關係と相等し。猶太國にありても亦師弟の道ハありたるものあり。即ち舊約書中の預言者の諸派よありてハ『神の人』たるもの即ち『預言者の子』の

教師にてありき。又洗施者ヨハネは多くの人に説教をなせし傍ら、随身の弟子を有したり。

希臘語よりて、弟子といふことを言ひ顯すに、その周圍の人といふ句を用ゆるを常とす。縱令ヘバソクラチスの弟子をソクラチスの周圍の人といふ類なり。之れを福音書よは、耶蘇已れと共よ置かん爲めよ十二弟子を撰ぶと云へり。此の場合に於てハ、その狹き意味より見れバ、已が弟子たるべき者の數を限りたるものならざるべからず。蓋し耶蘇よ從いんが爲めにその家業を抛つことを得るもの、その數多からざれバなり。耶蘇の住所は不定よして、之れが爲めよ定業あるものは、止むを得ず、隨從するを得ざりき。思ふよ一時假りよ耶蘇の弟子たりし人々もありしならん。蓋し或時は百二十人の弟子ありしと云ひ、或時は又七十人とも記されたれバなり。但しすべてを棄てゝ、朝暮其の側を離れざりしものハ唯十二人あるのみ。

されど斯くその數よ制限を立てたるハ、他よその理あることなり。教師は一人〳〵よその弟子を知り且つ觀察し置かざるべからず、彼の良母たらんとするよは、一々その子供の性質を觀察せざるべからざるよ同じ。夫れ説教家の群集に對するや、的を定めずして弓を彎くものゝ如し、未だ何人に命中するやを知らず、之れに加ふるに説教者は勤めて其説話の或格段なる人に渉らざらんことを注意せざるべからず。之れに反して、教師は其の談話をあらゆる問題よ及ぼし、又單刀直入言ふ所悉く一箇人の身上よ適中す。此を以て教師ハその談敵の性質を委しく承知せざるべからず。是れ十二人の名、輪番に記載せられ、且つその相互の關係をも示し置ける所以あり。思ふに十二人の性質及び經驗は、迭みにその類を異にし、自ら十二種の特色ありしなるべし。されどその數は別々の取り扱ひをなし難き程よ多しといふよあらず、而して主ハ詳かよその性質を知り得るまでその一人〳〵に就て觀察し且つ宜しきよ隨ふてそ

の處置をおし給ひき。主が約翰よ接するよ情篤かりしとは恰もその性質よ適しトマスを遇するに忍容寛仁なりしとも、またその機質よ投したるなり。只ペテロを待遇するの途よ至りては、師弟の交際を垂示せる者の尤も高尚にして且つ粹なるものなり。耶蘇のペテロを知るとは全くして欠くる所なし。強暴よして動き易き性質よ應するの巧みあると、良御者の奔馬を御するが如し。而して尤も満足なる成功ありき。主は水の如き變轉常なき性質を變じて之れを岩の如き確然不動のものとなし給へり。耶蘇は此の岩の上に新約の教會を建設し給へり。之れと同樣なる結果は全使徒社會よ及べり。只一人の反者を除き、使徒は悉く師の導びきよより、皆一樣よ教會の柱石、全世界の權力とはあれり。

耶蘇は説教者の職と、教師の職を兼ね給へり。説教者の職は極めて樂しきものよして、耶蘇はその時間とその身心を擧げて之れよ費すを得たるならん。群民は耶蘇を見て喧しく騒き立て、且つその求むる所い、眞よ基督の心を動かしたりさい云へ、基督い十二人を訓練するが爲めよ、その時間の多分を之れよ用ゐ給へり。法外よ只人數の多からんとを好み之を以て傳道の成敗をトしその全力を之れよ費すもの、大抵の教役者比々皆然り。衆人を鄙むいその名美よしてその實左程よもあらざるとなり。凡そ基督の心を以て心とせる説教者い衆人を鄙むとあるべからず。されと耶蘇の模範い他よ倚はその旨ありて存するなり。或人云く、廣狹の差は沼と川との差なりと。知言といふべし、而して此の問題を證明するよい、尤も妙なりとす。夫れ普通の人間の具へ居る程の力を法外よ廣き面積上よ施こし用ふるとあらん乎、その結果い寸許の深さなる水の沼よ於るよ異あらず。されどその力を一點よ集めたらんよい、滔々として兩岸を洗ひ、能く水車を轉ずるの川となすを得ん。今夫れ多數の人を集め、之れよ已が力を頒ち與ふるとあらんよい、その人々の受くる所の分、實に僅々あらんのみ。されどその力を施すよ或い十二人、或い六人、

或ハ一人を對手とおしたらんよハ、その結果、深くして且つ永かるべし。夫れ少數の人よハ教を說くを得るの人よして多數よ對してハ未だ必ずしも然る能はざる人あり、されど歸する所ハ遂よ徑庭あるべからざるなり。

二

或點より見れバ、基督の十二弟子を敎ふる方法、多數の群集よ於ける者と相似たる所あり。十二人ハ耶蘇の群集よ對してなせる談話を聞けり、蓋し十二人ハ常よ耶蘇と共よ在りたれバなり。之れよ反して基督の聽者の過半ハ生涯よ一兩度の外よ之れを聽きたるとあらず、その他十二の弟子ハ、私よ公會說敎とその仕組よ於て異なる所なき多くの議論を聽けり。又弟子等ハ基督の至る所よ隨ひ往きてその奇蹟の證を立てたり。されど多くの人ハ只一二ヶ處よ於てその行ひ給ひし奇蹟を見しよ過ぎざりき。その他基督ハ弟子等の面前よ於て特よ之れよ益する所あらんが爲めに大奇蹟を行ひ給へり。(縱令へば暴風波を鎭めしが如きをいふ)斯くの如きかへす〳〵及ぼし給へる大なる感化の利益は決して測り易からざるなり。

基督がその弟子に與へ給ひし特典は、自由に質問をなすことを許し、且つ之れに答へ給ひしとあり。若し夫れ公會の演說よ於て意味の明らざるものあるよ遇へば、彼等ハ私よその意味を質し、基督も又之れよ答へ給ひぬ。又基督の述べし眞理若しくハ智慧のことに關して、解し難き所ある時は、自由よその疑點を告白することを得、基督は之れを說明し給へり。故に基督の傳道を初め給ふよ方りてや、弟子等何故譬喩を以て說き給ふやと問ひ、その後ち再三領解し難き譬喩の說明を乞へり。基督、離婚よ關して嚴酷なる敎訓を述べ給ひし時、弟子等云く若し人妻よ於て此の如くば、娶ざるに如ずと。此の言更よ詳細なる議論を聞くの端緖となれり。又耶蘇富者の神の國に入よりハ、駱駝の針の孔を穿るハ却て易しと

宣ふや、弟子等絶叫『然ば誰か救を受べき乎』と問へり。此に於て耶蘇い一歩を進めて富の問題を委しく訓示し給へり。要するに『イエス』その弟子と共ゑ居るとき彼等ゑ悉く之を解聽せり』とい聖書の明文なり。

耶蘇い更に一歩を進め啻ゑ質問をおすことを許し給へるのみゑあらず して、亦質問をなせよと勵まし給へり。耶蘇い故意ゑその説を婉曲ゑし、以て盛に質問を起すの誘因となし給へり。耶蘇の自體い已に是れ譬喩的の談話をなし給ふの習慣を説明するものなり。譬喩は眞理ゑ被らしめたる幕の如し。聽者自ら之れを褻げ、半ば包まれ半ば顯いれたる美を看破せざるべからず。教師たるものい能く人をして獨立獨行の志を興さしむるゑあらざるよりい、將た何の必要かあらん。教師若し單に受動的にて他人の運動するを待ち、已れ自ら進んでなすことなくんば、眞正の教育遂に成るべからず。進歩發達い、自らその問題を研究するの志を起し、自ら眞理の解説に苦しみ、遂に滿足を得たしと思ふの念切なる時ゑ

於て初めて之れあるを得べし。基督の言は即ち能く弟子の心を燃ゑ立たしめたり、その意蓋し疑迷の熱情默止し難からしむるにあり、此ゑ於て乎弟子等耶蘇ゑ來りてその解答を乞いざると能いず。

教外の教師中の最賢人なるソクラテスの執りたる方法も之れゑ同じ。即ち、質問を以て教授の要となせり。ソクラテスは弟子の至るを見て、即ち大切なる問題例へば義、節制、智慧の如き弟子自ら充分に承知せりと信じ居る所を尋ねたり。之れゑ答へ終れば、次ぐに別問題を以てし、以て前答の當否を自ら判するゑ供す。此ゑ於て乎、ソクラテスは、彼處の側、此處の隅より問題を連發し、弟子をして、その持説は全く自家撞着の失ゑあるものにして、その思慮い未消化の塊團あることを悟らしめずんば止まず。

此の兩法、その目的い一なり。即ち獨立の識見を挑撥するにあり。されど又その間に一種微妙なる差異あり。ソクラテスい弟子の答へんとする

所を問ひ、耶蘇ハその弟子を勵まして問題を出さしめ、已れ自ら之れヨ答へ給へり。要するヨ哲學家の目的とする所ハ、思慮を練るヨ在り、問題ヨ對する答按ハ、多く問ふ所にあらず。哲學家ハ公言すらく、我等の勉むるハその眼目、眞理を研究して知力を練るヨありと。或哲學家が、若し神あり、一手ヨ眞理の研究を持ち、一手に眞理を持ち、隱意ヨその一を執れと云はゞ、余ハ直ちに前者を執らんと云ひしとあるハ世人の遍く知れる所なり。是れ哲學社會にありてハ、或ハ明言ならん、されど宗教社會の知者ハ、一人も此る嚮言をなさゞるなり。耶蘇は教師として眞理を擁護せり。眞理の研究ハ思慮を練るべしと雖、我等ハ單に研究を以て滿足すべきヨあらず。靈魂の大問題に答ふる所なくんばあらず。此を以てソクラテスは問ひたれども、耶蘇は答へぬ。靈性上の問題の解釋に苦しみ、疑難の霧中に彷徨したるものハ、遂ヨ耶蘇に來らずんばあらず。『主ヨ我儕は誰に往んや、永生の言を有る者ハ爾なり』。

三

基督の十二弟子を教練せし目的は、己が相續人を作り置かんが爲ありといふハ、稍過刻なる言なり。蓋し耶蘇一家の最大事業たる艱みと死によりて世を贖ふとハ、相續者あるとなく、又之れあるを得ざればなり。耶蘇ハその業事を完成せり、他人をして之れを補ハしむるの餘地を遺し給はず。

夫れ然り、然れども耶蘇の教師たりしとハその相續人を教練するヨありといひたりとて、我等ハ能く之れを辨解するを得べし。耶蘇の地より擧げられし時、そのなさゞるべからざる事、又此の世に在せしあらば、引き續きてあし給ふべき事等、全く弟子等の肩に落ち來れり。弟子等ハ耶蘇の斜合せし味方を保護し、且つ世に立つの嚮導者たらざるべからず。耶蘇はその業を初め給ひし以來、豫ねて此の事を承知し給へり。故ヨ弟子等夫れ〳〵その業務を有し何時までも之れヨ從事したらんには全

く耶蘇を忘却するに至るべき勢ひありしにも拘らず、耶蘇は自ら進んで熱心亡き跡の相續者を準備し給へり。

耶蘇の最初の間、己が事業の下働き、補助者として弟子を用ゐ給へり。その一例を擧ぐれば、聖書によれば、イエス自らバプテスマを施せるに非ず弟子これを行るなりとの明文あり。彼等稍久しく耶蘇と共にあり、己に經驗ある基督教徒となるに方りてや、即ち之れを派遣して隨意に働かしめたり。彼等の餘り遠からざる旅行をなし、教を宣べ、病を癒し、後ち歸り來りて行へる事と教へし事とを悉く耶蘇に復命し、更に前途の方針に就て教を乞へり。斯くて師の未だ永生の種を蒔かんとて來り給いざるに先ちて、弟子等己にその地を開墾し置きたるともあり、又耶蘇自ら至り給ふの暇なくして打ち過ぎし地方も是れありしなり。兎に角弟子等自ら進んで教會建設の勞に當り、耶蘇の名に於て世に勝つべき日の來らんとするを望見し、耶蘇の豫想せし如く、その力愈〻加はり、その信仰愈〻進めり。

獨り過去の大事件に止まらずして、將來の出來事にも我等の意を用ゐしむるものは、是れ眞正なる基督教の一特性なり。尋常の人は殆んど將來に意を止めず、是れあるは只子孫の計をなす位のことなり。己れ一人樂しくば、沒後の世の有樣は毫も痛痒の感なし。基督教徒は然らず、その心の信仰と愛とは、未だ生れざる聖徒に結び付き、死後の世の有樣と、天國の事などに意を止むるものなり。基督の事業の隆盛ならんことを望むは基督教徒に取りては死前と死後と異なる所あるべからず。此を以て我等我が事業を繼續するものゝことをも慮らざるべからず。基督はその事業に着手し給ひし曉より之れを思ひ給ひたり。是れ決して早きに失したるにはあらず。

人の事をなすや、只己が力にのみ依賴して、一身の時間と勢力を費さんよりは、寧ろ少壯の徒を率ひて之れを訓練する時は、その功績却て多か

く耶蘇を忘却するに至るべき勢ひありしにも拘らず、耶蘇は自ら進んで熱心亡き跡の相續者を準備し給へり。

耶蘇い最初の間い、己が事業の下働き、補助者として弟子を用ゐ給へり。その一例を擧ぐれば、聖書よイエス自らバプテスマを施せるに非ず弟子これを行るなりとの明文あり。彼等稍久しく耶蘇と共にあり、己に經驗ある基督教徒となるに方りてや、即ち之れを派遣して隨意に働かしめたり。彼等い餘り遠からざる旅行をなし、教を宣べ、病を癒し、後ち歸り來りて『行へる事と教へし事とを悉く耶蘇に復命し、更に前途の方針に就て教を乞へり。斯くて師の未だ永生の種を蒔かんとて來り給いざるに先ちて、弟子等已にその地を開墾し置きたるともあり、又耶蘇自ら至り給ふの暇なくして打ち過ぎし地方も是れありしなり。兎に角弟子等自ら進んで教會建設の勞に當り、耶蘇の名に於て世に勝つべき日の來らんとするを望見し、耶蘇の豫想せし如く、その力愈〻加はり、その信仰愈〻進めり。

獨り過去の大事件に止まらずして、將來の出來事にも我等の意を用ゐしむるものは、是れ眞正なる基督教の一特性なり。尋常の人は殆んど將來に意を止めず、是れあるは只子孫の計をなす位のことなり。己れ一人樂しくば、沒後の世の有樣は毫も痛痒の感なし。基督教徒は然らず、その心の信仰と愛とは、未だ生れざる聖徒に結び付き、死後の世の有樣と、天國の事などに意を止むるものなり。基督の事業の隆盛ならんことを望むは基督教徒に取りては死前と死後と異なる所あるべからず。此を以て我等我が事業を繼續するものゝことをも慮らざるべからず。基督はその事業に着手し給ひし曉より之れを思ひ給ひたり。是れ決して早きに失したるにはあらず。

人の事をなすや、只已が力にのみ依賴して、一身の時間と勢力を費さんよりは、寧ろ少壯の徒を率ひて之れを訓練する時は、その功績却て多か

るべし。余近頃醫學略誌を讀む、醫學はその源、希臘の博物學者に發し、中世亞剌比亞の醫師を經て、遂に近代の如き新なる發明、題を接して臻るの域に達せし進歩の迹を繹ぬ、頗る愉快に覺えたり。されど該歴史中許多の人名を聯ぬる中に、殊に余の注意を惹きしものは、その功績頗る大なりしにも拘らず、尚ほ自ら之れを己のものならずと許せし人是れなり。此の人は年若き醫師を多くその側に侍せしめ熱心を以て之れを導びき、後ち疑點を示して自ら決する所あらしむるを例となせり。此の人の學術に功勞多かりしとは、斯る研究の結果なり。現今の基督教會に於て、斯く壯年を導びき、その勞を樂ましめ、その方針を示し、その天才を利用する人よりも、必用なるものなし。教師として斯る職を執らば、彼のパルナバがパウルをして教會に入らしめしが如く、却て己が働きよりも立ち優りたる功業をなし得べき人を基督に仕へしむるを得ん。

四

思ふに近代、教師として耶蘇の事業と酷だ相似たるものゝ、神學の教授たると是れなり。教授の首章は十二使徒の學校と題せり。氏は別に類似の功の點を擧ぐ。曰く、例へは壯年の宣教師は、己が牧へる青年に於て、或は教場に於て、或は散歩の時、或は食事の時、或は以てし、之れに傳ふるに熱心を以てし、其の同情を長しれに示すに方法を以てし、その青年中より、尤も有用の才を撰び、之れその才を集めて發達せしむるの注ぎあり。グラスゴーの博士チャルモルスは青年を愈見せし精神を注ぎ込み、立ちてその事業を助けしめ、青年を盡て後年基督教徒の精鋭なるものたらしめんを勉む。是れ基督十二弟子の例に頗る相似たる者なり云々。今神學校にある生徒諸氏は、十二弟子がその獨立の働きをなす爲めに四方に派遣せられざりし時と同一の地位に在るものなり。而して若し基督と十二弟子の交際を詳かに研究する時は、教授と生徒との關係も明かなるを得べし。

基督と十二弟子の關係に就て、尤も高貴なるとは、その基督と共にありて、日々に驚くべき性行を目擊し、冥々の裡に聖德の感化を受くる特權を有したることなり。約翰は他日三年間の經驗を顧み、之れを一言に

約して云く、我儕その榮を見ると。此に用ゐたる榮なる言い、贖罪所より出づる光を意味するなり。ペニケ及びベリアを經て寂しき旅をなせし時、ガリラヤの山邊に於て首を擡めて相語りし時、弟子等皆、至聖所の己が爲めに開かれたると又名狀し難き美麗よその面を對しつゝあるとを感じたり。

思ふに現今神學の研究上重もなる欠點は、師弟の間に親密の交際を缺くと是れなり。大よ此の弊を改めたる教授は寥々指を屈すべし。親密なる交際は必ずやその効あるものなり。學生の眼孔はど鋭敏なるものは他よその比あるべからず。學生よして若し或人に親炙するとあれば、著しくその風を摸す。その教授を信任する點より云へば彼等は英雄崇拜者よてあるなり。されど一たびその信を失ふ時い、彼等の之を侮辱すると測るべからざるものあり。彼等は名聲に眩せらる。されど何時までも彼等を感化して誤らざるものは、只嚴正と明達とあるのみ。

自ら進んで毫も意を衆議に介せず親しく學生と相交りたるもの、近時に在りては余の知る所只一人あるのみ。その行い、基督に似たりともいふべく、今此に一言し置くも、亦無益ならざる摸範なり。

曾て神學に指を染めたるとある程の人い少くとも教授トーロックの名を聞き居るとならん。その註解及び辨證に關する著書頗る多く、依て以て當世紀の福音的神學者間に高き地位を占め得たり。されど教授い改革的勢力として一層高き地位よあるものあり。英國の教會に對するヴウエスレー、蘇國の教會に對するチャルモルス、瑞西の教會に對するヴイテー等の功業は是れ教授が獨逸の教會に對してなせる所のものなり。教授は舊偏理派と稱して英國の溫和派に相當せる一派と戰ふて之を破り、又當世紀の初めの十年間に福音的基督教をして獨立の一大勢力たらしめたり。識者或はシュライエルマヘールを此の地位に推さん。然り彼が勢力の廣大なると原さより論なし。されど獨逸に於て福音的基督教の復興は、その實之れをトーロックの生涯に師せざるべからず。シュライエルマーヘルは該運動に道理

的の分子を加へたる人にして、即ち感情に逸れるものなり理論に導びきたりき。されど感情の教興してその項點に達するまでには、幾多の下拵を要するへもなり

されど教授が此の事業を完成したる方法は、主として、神の教會は長く彼れを紀念せざるべからざる一事ありたるに由る。教授の神を信じ、中學校教師に任せらるゝや直ちに獨逸に於て他に比類なき一種の學生とその交際を求めたり。教授はその椅子に坐して講義するを以て自ら滿足せず、學生を基督に導びかんとて一々之れと相交はれり。或時ゝ相携へて歩し、或時はその室に訪ひ音づれ一周両回學生を己れの室に集めて祈禱をなし聖書を研究し、傳道策の報告をなせり。日を經てその學生の增加するに隨ひ、その勞も尠きにあらざりしと雖もその熱心ゝ毫も衰ふることなかりき。教授は許多の事業一身に輻湊し、教場に充ち溢るゝ學生に講義の用意をなし、又教授をして世界に大名をあさしめたる書籍の出版に從事し、而も一日四時間學生と手を取りて散歩することを廢せず加ふるに交る〳〵學生を晝食又ゝ晩餐に侍せしめざることなかりき是れ淺薄皮相の事業にゝあらず。彼の何の用意もなきに、宗教上の問題を突拍子にその談話に交へたりとて、深く人の靈魂の爲めに苦心したりと自信する人のなす所とは同日の談にあらず。教授ゝその學生の氣を授せんとて本問題を談話を進むる能ゝずして止みしとも往々よしてこれありき。教授性快活にして諧謔を善くし、奇怪なる問題を出して學生の機敏を試み、教授と共に散歩するの特典を得たるものゝ、數週の後までその學得せし滑稽諧謔を人に語り傳へたりといふ。教授ゝ性敏捷能く人を導びきて已が得意の問題に立ち入らしむるの術に長じ且つ書籍と研究法に就てゝ、學生に貴重なる助言を與ふるを得たり。教授ゝ人方より人の意志を奮勵作興せしめ、才智と靈魂の警醒、教授の力によれる者尠しとせず。されど身體の營養を度外にするにあらず、貧困の學生を憐むと全獨逸に教授の如きものゝ未だ是れあらず。教授常

と眼を一點に定め之に向つて着々その歩を進めぬ。即ち日々にその面を合する學生を一々救へんとなしたりき。

教授へその報を得たり。生前已にその大功を知られ、死後傳記の公にせらるゝに方りてその功業愈詳になれり。學生及び宣教師より寄せ來りし數百の書翰に教授を呼んで靈魂の父となし、その中に於い當代の獨逸文學史に大名をなせし人もこれあるを見る。又福音の役者として獨逸の講壇に立ち若しくは教授の職にある者にして教授の導びきに依れるもの現時その數百を以て算ふ。

教授が曠世の人物たる所以如何、官吏、商人、教師、教會、學校の間にその比類なき理如何、蓋しトーロックへ左の一句を以てその生涯の秘密を說明せり。曰く『我に一の熱愛あり、基督これなり』

第十五章　對論家たる基督

馬太傳五章二十一―四十八
同　九章十―十三
同　十二章二十四―四十五
同　十五章一―十四
同　十六章一―四
同　十九章三―十二
同　廿一章廿三―四十六
同　廿二章
同　廿三章

路加傳七章三十六―五十
同　十章二十五―三十七
同　十一章三十七―五十四
同　十二章一
同　十三章十一―十七
約翰傳二章十八―二十
同　五章
同　六章四十一―六十五
同　七章十―五十三
同　八章十二―五十九

第十五章　對論家たる基督

世に云ふ、眞理の殿の敎師は三種あり、一に云く、道行く人を支へて入り來らしめんが爲め門前に立番する人。二に云く、勸めは遇ふて內へ入り來らんとする人を伴ひ込み、倉庫や密室の說明をなす人。三に云く、殿內を巡邏し、神宮を警衛保護して敵の攻擊を防ぐ人。之れを要するに、以上の三職中、第一は說敎者、第二は敎師にして第三は即ち對論家たるなり。

一

現今にては、對論といふ語好ましからぬ名となりぬ。只之れを聞きしのみにても心を激昂せしめ、大抵の人の想像にては、對論家を以て愛すべく、尊ぶべきものとはなさぬなり。神の命によりて對論の職を奉する人は、他の基督敎役者に比して基督敎信者の同情と尊敬を得ること少し。此を以て道理を充分に解し得たる人にありてすら尙ほ自ら爭論の空氣

中に蹈み込みしとを悲しみ、他の職務に從事せざりしとを悔ゆるならん。基督教徒一般の思想斯くの如し。下の如き結果を生するも亦自然の勢なり。曰く、才力ある人の事に茲に從ふを避け、已が才力に應じて適當なる報酬を得べき他の職務を執るに至ると是れなり。此に於て乎對論い多く劣等なる人の手に落ち輕卒にも教會の安危に大關係ある議論を喋々し、有力家の助けを借りて之れに尊嚴を加へんともせず。世人一般の感情已に斯の如し。今其の原因を推究するも興あるとならん。蓋し立派なる道理ありて存すると疑ひなければなり。思ふに議論の極端なるものい是れ時勢の反動より生したるものなるべし。蓋し議論い教會の要素なりといいへども、決して最要素あるにあらず。議論若し度を得たらんにい有益なりといへども、之を超ふる時い有害あり。眞理に熱心なる人い、時として慈善に熱心あるとを忘るゝとあり。議論なるものい、小やかなる點に齷齪し、基督教徒にありてい、意見を異にしながら相容れ置く程の廉も火になりて論爭するとあり。人若し己が情慾を恣にする時い、物の比較を取る感じを失ひ、瑣々たることに全力を費して大問題に臨みてい、却てなす由もなくて過ぎんとす。その他種々の事に對して安心立命する所おきに至るべし。蓋しその精神に由おき爭ひをおしたりと感じてい、本營の危險に迫れる時すら氣力亡せて容易くい奮起せざる樣になればなり。而して此の責に任ずべきものい即ち教會なり。

さいいへ、議論を忽諸に付する樣にならんとい、時勢の吉兆にいあらず。本書の序文にも陳述せしが如く、我等福音書に基きて人生の各部面に於ける耶蘇の行實を此に悉く列擧する能いず。若し之れをなし得たりとせんか。その行實中の最多なるものい、基督の對論にかゝいる事實にして、即ち本章の附錄ともあるべきものなり。基督の傳を見よ、毎葉殆んど對論ならぬいおし。基督い喜んで之れに從事し給ひしにあらざるい萬

々なりといへども、又生涯の問進んで之れゝ當り、特ゝ末期ゝ臨みて然りとなす。基督の上足たらんものゝ、古も今もおしなべて之れゝ倣ゝざるを得ず。使徒保羅ゝ天性己ゝ身を以て議論ゝ投せざるを得ざりしなるべし。使徒約翰の如きも相讓らざる熱心を以て議論をなさで止むと能ゝざりき。されど何れの教會と、何れの時代とを問ゝず、此の人こそ議論を戰ゝすことを避け得たるなれとてその名を擧げ示さんと殆んど難し。

眞正なる對論家ゝ、一ゝ眞理ゝ造詣し、萬人をしてその價値を確信せしめ、その結果として誤謬を惡み、斷乎として之れを離れ去らんとの念を起さしむるを以てその精神となす。基督の議論を闘ゝすや、即ち眞理の王(約翰傳十八章卅七)として之れをなせり。又基督ゝ人類をして誤謬の螺堂を脱せしめんとの仁心を抱き給へり。對論を蛇蝎視することゝ、是れ教會が眞理ゝ造詣するの感覺を失ひ、又眞理と誤謬の價値の大差異を蔑視するゝ至りし兆なるべし。

二

對論の種類により、人々自らその感情を異にす。教外の誤謬と相戰ふとは對論の作用中の一なり。基督教は絶えず種々様々なる不信説の攻擊を受く。或時は自然神教を討ち平けざるべからざることあり、或時は凡神説を敵に引き受け、或時は物質論と鋒を交へぬ。斯る攻擊に對して基督教的の眞理を保護する時には、其味方多からずとせず、其の報酬意外に篤きとあらん。斯の種の對論ゝ、斯る理由あるが爲めに、能く訓練せられ、時としてゝさして必要なき所に之れを用ふることあるゝ至る。されどその性質若し正しからば、その價ゝ測り易からず、而して現今ゝありてゝ此種の秀でたる對論家を要すること甚だ切なり。蓋し當世紀の辨證的問題ゝ未だ全く解釋し了らざるを以てなり。

教會内の對論ゝ戰栗と嫌惡を發さしむるものあり。されど主ゝ之れを

教會内に於て用ゐ給へり。故にその上足たる人々も之れを用ゐぬ。對論の憂音にして平和の堂内に鳴り響くとなければ、無論幸のとなりといへども、さりとて亦眞理の殿堂ある限りは、致し方もなし。基督の御代にも、對論は誤謬の堡塞なりき。その後も誤謬の之れに據りて自ら守りしとは、一二回に止まらず。耶蘇は當時の教式教理大抵は之れを攻擊せざるべからざりしといへども、思慮ある人の爲めには、何時も忍び難き所爲ならざるべからず。蓋し偉大なる問題を隈なく考ふるの時間と才力とに乏しき蒙昧なる人々が、靈の指導として頼み入りしその信仰は、人生てふ建物の尤も神聖なる柱なるを以てなり。然るを恣に之れを倒し去らんとす、無情何ものか之れに過ぐべき。されど亦時としては、之れを倒すの必要あるとあり、而して耶蘇は之れをおせり。

勿論反對の場合も起るとなしとせず。即ち教會は眞理を有せるに、改革者は誤謬にあるとは是れなり。此の時に於て基督教的對論家の處すべき

地は、教會の味方となりて、之れを誤らんとする人に反對するにあり。是れ亦美事なり至大なる基督教的の智慧を借り、且つ時としては、感謝の念を以て之れに處せざるべからず。蓋し、外來の誤謬に反對して教會を保護せんとする者は、信仰の救主てふ名譽を負ふべしと雖、内より起る一層恐るべき危險を防き止めて教會を安からしめんとする人は異教の獵者(異端者を彈劾攻擊する者を云ふ)てふ忌むべき厭ふべき稱號を脱するを得ればなり。されど自ら異端者となりし正面より教會を攻擊すると正道を守りて能く教會を保護し、之をして眞理を教へざるの誹りとからしむるとの中間は、眞正なる基督教徒の立つべき倫理上の地歩ありとしも見へざるなり。

三

基督とその論敵たる猶太の教師等とは、その議論の勝敗を決すべき標準と證據とを同ふしたりき。両者とも舊約聖書を以て神の道なりと認

教會内に於て用ゐ給へり。故にその上足たる人々も之れを用ゐぬ。對論の憂音にして平和の堂内に鳴り響くことなければ、無論幸のことなりといへども、さりとて亦眞理の殿堂ある限りは、致し方もなし。基督の御代に於ては、一二回に止まらず。耶蘇は當時の教式教理大抵は之れを攻擊せざるべからざりしといへども、思慮ある人の爲めには、何時も忍び難き所爲ならざるべからず。蓋し偉大なる問題を隈なく考ふるの時間と才力とに乏しき蒙昧なる人々が、靈の指導として頼み入りしその信仰は、人生てふ建物の尤も神聖なる柱なるを以てなり。然るを恣に之れを倒し去らんとす、無情何ものか之れに過ぐべき。されど亦時としては、之れを倒すの必要あることあり、而して耶蘇は之れをおせり。

勿論反對の場合も起ることなしとせず。即ち教會は眞理を有せるに、改革者は誤謬にあることは是れなり。此の時に於て基督教的對論家の處すべき

地は、教會の味方となりて、之れを誤らんとする人に反對するにあり。是れ亦美事なり。至大なる基督教的の智慧を借り、且つ時としては、感謝の念を以て之れに處せざるべからず。蓋し、外來の誤謬に反對して教會を保護せんとする者は、信仰の救主てふ名譽を負ふべしと雖、内より起る一層恐るべき危險を防き止めて教會を安からしめんとする人は異教の獵者(異端者を彈劾攻擊する者を云ふ)てふ忌むべき厭ふべき稱號を脱するを得ればなり。されど自ら異端者となりし正面より教會を攻擊すると正道を守りて能く教會を保護し、之をして眞理を教へざるの誹りあからしむるとの中間は、眞正なる基督教徒の立つべき倫理上の地歩ありとしも見へざるあり。

三

基督とその論敵たる猶太の教師等とは、その議論の勝敗を決すべき標準と證據とを同ふしたりき。両者とも舊約聖書を以て神の道なりと認

承す。是れ耶蘇が猶太人の間に傳道するに當り、他の國民に對していあり得べからざる一種の特色を帶びたる所以にして、その傳道をなすに專ら對論を事とし給ひしも之れが爲めなり。耶蘇が優者の地位に立ち給ひたるい、その両者の勝敗を決すべき標準に通曉すると敵よりも一層明なりしによる。彼等い實に一國中の學者なり。舊約書いその教課書たり。而して耶蘇い如何といふに、折あれば彼等が嘲笑せし如く、少しも學びたるにいあらず。されど耶蘇のその父の道を愛するの篤き、之れを研究するの忍耐忠實なる、耶蘇をして彼等の力にて當るべからざる程の者とならしめたり。耶蘇い記憶の倉庫を探りて所有る場合に應じたる句を引き出し、又彼議論を倒さんとするや、時として先づ『未だ讀まざる乎』といふ一問を以て聖書を引用し、自ら通曉せりと自負する人々を辱かしめ給へり。又或時い更に嚴肅なる句を用ゐ『爾曹聖書を知ざるに由て謬れり』と宣へり。

されど耶蘇い聖書に關してい、單に自力にのみ依賴せしにいあらず。是れ小對論家の爲す所、句を以て句に當り、最後に只一句、敵よりも多からばそれにて滿足する人の業なり。斯る對論い風の隨意に吹き散る海濱の砂の膏氣なきが如く、烏雀の爭ひの三文の價だになきに似たり。教會の對論職を辱かしめたるい、此種の對論なり。眞正の對論家い啻に聖書の句に通曉せるのみならず、又聖書の本義に通じ、已が經驗を以て聖書を說明し、神に咫尺してその事業に熱心と威嚴とを添ふるなり。

耶蘇の眼光い聖書の紙背に徹し思ひの儘に之れを活用して毫も差支を見ざりき。是れ耶蘇が舊約書を引用するに當りて大抵いその新意を發揮し給ひたる所以なり。其狀恰も耶蘇の手一たび之れに觸るれば粉々に碎け、その中より光り輝く玉の出で來るに似たり。時としていい耶蘇い只文字を解釋し、亦反覆するが如くにして、能く聖書の大体に就てその原理を綜合し、(馬太傳五章卅一、卅三)滿腔の熱心を以て父の道を

愛し、且つ之を尊みながら、已に天啓の機關として舊き天啓の此の中に沒入せらるへきものなると、猶ほ星の光の曙光に沒し去るが如きものなるを知りたりしなり。

されど耶蘇の對論家として運動し給ひしに、單に聖書に關してのみのとなりあらず。對論家の擧て正鵠となせる人間の常識とその理性に訴へたり。――俗學と、權勢に狂げられず――若し夫れ議論の勝敗を公衆の前に決するの時に方りては、之れを機智に訴へ、之れを記憶し易き短詩となせば其の功測るべからざるものあり。耶蘇はその聖言によりて徵せらるゝが如く著しく此の才を具へ給ひたり。今その著明なる一二を擧げんに『彼等奇として、イエスを去ゆけり』『カイザルの物はカイザルに納め、神の物は神に納よ』是れなり。

四

今日に於て對論の倫理を說明するに當りては、論敵に接するに丁重を以てすべしとの義務を第一に論ずべきなり而してその議論を鬪はすは、嚴酷なるべくその人を待ふは謹直なるべく、斯くてこそ淸廉の譽を得へきあれ。

下に陳ぶる所は是れ天下の至理なり。人間は他人の善を見ると難し。而して一旦物に激するや、偏見の爲めに、容易く他人の長所を沒し去るに至る。されと我れ我事を知ると甚た明なるを以て、思ひ切りて他人に石を投し兼ぬるなり。何人か常に能く眞實公正なるを得べき。而して論敵といへども、我が見得ぬ側面を見るとなしとせず。神は時として、一箇の眞理を半分づゝに分けて之を敎會に與へ、相互の異見を鬪はして遂に全体を得させ給ふとあり。相互の衝突より發したる火は、雙方を鎔解して遂に一致せしむるなり。

此の規則妙は即ち妙なりといへども、亦例外なきにあらず、耶蘇之を破り給ひたればなり。耶蘇は當初その論敵に接するに丁重なりしや、否や

充分記錄の徵すべきものなし。されど、その末期よ及びてゝ、他人の非を發くこと愈嚴峻となり、頗る急激なる語氣を以てパリサイの人、學者及び祭司を罵れり(馬太傳二十三章)

他人の品格を承知し居る時ゝ、我れの其人の意見よ對するの見込よ少からぬ影響あることを明なる事實なり。我等之を公よ口よする能ゝずとすると、然れども內實ゝ反對者の品行の故を以て彼れの意見よ毫も重きを置かざることあり。此よ一人あり、その實際ゝ徹頭徹尾無宗敎家よして、且つ此類の事理を辨ずる才識なく、又縱令ひ眞理を解したりとも心よ快からざるの故を以て之を表白するとなしとせよ。然れども、其人ゝ尙ほ新聞よ、演說よ、堂々、宗敎上の問題を論ずるよ於て差支なし。或場合よ於てゝ、之を公よするとその義務なり。耶蘇ゝ屢、猶太の敎師よ語りて云く、汝等をして我れを知らしむることを難し、蓋し汝等ゝ眞理よ對して同情の念なければなりと。而して祭司又ゝパリサイの人々ゝ、其議論を辨護するの新法として僞善を以て之れを被へり。斯る假面あるの議論よ對してゝ。その判斷を誤ることなきを保せず。されど耶蘇ゝ、充分よ己を信じ、遂よその敵の眞相を發き、その議論を說破せり。

五

されと耶蘇ゝ對論の鋒を進め給ふ時よも、敵者の論ずる所よ正實なる記號、少しよてもこれあるを見てゝ、蹈み止まりてその精神を窺ひ知らんとおし給へり。

耶蘇ゝその生涯よ於て、一日激論をなし給ひしとあるゝ、福音記者の精密よ注意したる所なり。即ちその苦みを受け給ひし前週の一日のとよて、いとも恐るべき性質の團塊、その敵者の中よ起り、耶蘇を說破論詰せんとなせり。學者とパリサイの人ゝ勿論のこと、久しく隱れ居しサドカイ人もその巢窟を出で、互ひよ軋轢せしパリサイ人とヘロデの徒もその目的の同しかりし爲めよ一時ゝ一致せり。彼等ゝ豫め謀じ合せて質問

を作り、人物を撰び出し、殿に於て疊みかけ〳〵攻擊をあせり。されどこゝ彼等の爲めに、禍の日なりき。蓋し耶蘇ゝ斷乎として『誰一言これに答ることゝ能ゝず、此日より又とふ者なき』迄に說破し給ひたればなり。

斯る騷々しき最中に當り、耶蘇が常人に異なりたる待遇をなし給ひし對論家出でぬ。此の人ゝ基督に關して、多く知らざるなれども只よく何處にても反對論を唱ふる人かなとのみ心得居たり。されど此の人ゝ學者なり。その同輩ゝ基督を攻擊す、故にその渦の中に卷き込まれたり。彼ゝ耶蘇を以て世を惑す者とおし、之れを滅さゞるべからずと考へ、又實に手を下さんとなしたりき、然れども彼ゝ耶蘇より得たる答案の爲めに豹變せり。蓋しその答ゝ正しくして、基督に對する惡感情を打ち忘れしめたればなり。その斯る心掛ありしとゝ、彼れが質問をなせし時の調子にて知らるゝなり。

諸誡の中何れ首なる乎とゝ、實に取るに足らぬ質問なり。是れラビの派にて他の論理を破らんとするに用ふる慣手段の一なり。思ふに此の人ゝ恐く他のラビにすぐれたる者と自任し居りしならん。されど耶蘇ゝ此人の風采に於て一點心に稱へるものあるを發見し、無下に之れを辱かしめ給ふことなく、或他の場合に於ける如く、滿足に又熱心なる答を與へ給へり。云く『諸誡の首はイスラエルよ聽け主なる我儕の神は即ち一の主なり。なんぢ心を盡し、精神を盡し、意を盡し、力を盡し、主なる爾の神を愛すべし。是誡の首なり、第二も亦これに同じ。己の如く爾の隣を愛すべし。斯より大なる誡なし』と。

此の教訓ゝ我等の熟知せる所、之れを聞きて左程の感動もなし。されど初めて聞きし者ゝ、深く畏敬の念を起せしと疑ひなし。彼をして辨を好むの徒より一變して至誠の人とならしめしならん。且つ啻にその議論を破りしのみならず、又胸襟の戸を押し開きて直ちに良心の底に徹せしめ、その反響立刻に起れり。云く『善かな師よ、爾神ゝ即ち一にして他に

神あしと曰しゝ誠あり。また心を盡し智慧を盡し、精神を盡し力を盡して之を愛し、又おのれの如く隣を愛するゝ諸の燔祭と禮物よりも愈るあり。』

是れ高尚なる答なり。此人ゝ豫期の術策を忘れたりき。亦已が味方を忘れ、已が味方の已れゝ對して希望あるを忘れ、肺肝を傾けて基督の威嚴ゝ服したり。耶蘇ゝ此變化を見て充分ゝ滿足し給ひ、之れゝ告けて云く、『爾神の國より遠からず』と。

是れ一大摸範なり。對論の時、嚴しく究追する時ゝ、之を穩和ゝ取扱ひ置けば旗を捲かんとする人をして却て頑固なる反對を試むるゝ至らしむると少しとせず。其の心ゝ頗る基督教ゝ相近き人ゝても、外見ゝ反對者なるが如きとあり。此の人々をして神の國の外ゝあることを證し知らしむるゝ容易の業なり。されど爾かせんよりゝ此人々をして天國の玄關を去ると數歩の間ゝあるを知らしむと更ゝ美ゝしき事なりとす。夫れ嚴しき論駁ゝ依りて得たる勝利ゝ僅かゝ己が情を慰むべし。而して基督の如く從容平和なるを得んとゝ思ひも依らざるなり。

第十六章　感じの人なる基督

馬太傳八章十七
同　九章三十六
同　十四章十四
同　十五章三十二
同　廿章三十四
馬可傳一章四十一
同　四章三十三
路加傳七章十一—十五
馬太傳八章十
同　九章二、二十八
同　十一章六
同　十三章五十八
同　十四章三十一
同　十五章二十八
同　廿六章十三—三十八
馬可傳六章五、六
同　八章十二
路加傳七章九
同　十七章十七

馬太傳十六章二十三
同　十七章十七
同　二十六章五十、五十五
馬可傳一章二十五
同　三章五
同　十五章三、五
路加傳四章三十五、三十九—四十一
約翰傳十一章三十三—三十八

馬太傳二十七章三十四
馬可傳十章十三—十六、二十一
同　十二章三十四
路加傳十章二十一
同　十九章四十一
約翰傳八章一—十一
同　十二章二十七
同　十三章二十一
同　二十章十六、十七
馬太傳八章
同　九章三十
同　十二章十六
同　十四章二十二
同　十六章二十
同　十七章九
馬可傳七章二十四、三十六
同　八章二十六、三十
約翰傳五章十三
同　六章十五

第十六章　感じの人なる基督

基督の傳記に就ては、當世期に至りてその研究至らざる所なく、斷片の餘紙と雖、記錄の徵すべき者なる時は、精細の吟味を盡くし、今や此の問題に對して殆んど未發見の新說を遺さゞらんとす。只その感情の力に至りては未だ盡さゞる所甚だ多し。姦淫をなせる婦人を曳來りし時に於ける基督の擧動は此の感情の痛切なる一例と云ふべし。また身を風て地に畫り（約翰傳八章八節）主は何故斯くはなし給ひしやらん。蓋し不潔なる話を聞くに堪え給はざりしなり。Ecce Homo と擧げて群集を見渡すと云ふ書に云く、主は之れを聞くと恥らひ給ひ、その面を向くるに忍び給はざりき……主は如何はせんと打ち惑ひ、即ちその面を隱さんとて身を屈め、指もて地に畫き給へり。此の說寔に痛切といふべし。Ecce Homo の著者は更にその語を繼て云く、耶蘇以後には斯る感情を抱くものは絕無ならんかと。恐らくは耶蘇降生の前にありては恐らくは絕無ならんかと。

耶蘇にその言さかしく、その行高大なりしと共にその感情斬新にして且優美なりき。而してその如何なる意志によりて事をなし給ふかに幾分か耶蘇と同樣の感を懷きしものにあらざるより、往々測度し難き

ものありとす。耶蘇ハ人類ヨ敎ふるヨその感情を優美ヨすることを以てし給へり。さればその降世後ヨ在りてハ、之れが行ひを學びて從事の弊風大ひヨ改まり、婦幼貧賤を愛敬するの俗盛んヨ起るヨ至れり。

耶蘇ハその居り給ひし地位ヨよりて種々の感情を動かし給ひたるとハ福音書ヨ記する所極めて夥し。中ヨ就てヤイロの女を生かしたる一事ハその好例なり。

一

基督の同情ヨ篤きこハ此の一例ヨて明かなり。

馬可ハ曰く或人將ヨその一女を失ハんとす。依て耶蘇ヨ來りて熱心ヨその女を癒さんことを乞へりと。耶蘇ハ此る要求を見て默止し給ふと能ハざりしなり。ナインの嫠と一子の例も殆んど之れとその例を同ふせり。主ハ棺ヨ隨へる婦人を視て、痛く同情の感を動かし『哭なかれ』と云ひ給へり。又當ヨ斯る場合ヨ必要ある補助を與へ給ひたるのみならず。之れヨ倍したる憐愛を加へ給ひたり。又耶蘇ハラザロを生かし給ひしのみならず、その姉妹と共ヨ泣き耳聾ひたる人を愈すヨ方りてハ嘆じてエッパタといひ給へり。すべて基督のなし給へる醫療奇蹟ハ一もその感情の結果ならざるハなし。只義務上よりして悲しめる人の家ヨ至り、訪ひ慰めたりとの口實を作る輕薄なる醫師又ハ敎師ハ、之れを彼の涙を以てその人を慰め、俱ヨ共ヨ絶え入りなん程の思ひ遣りをなす人ヨ比すれば、其の間霄壤の差あるなり。

ヤイロの女を生かし給ふヨ方りてハ、基督の之れを憐れむとその幼者なりしが爲めヨ一層深かりき。父ハ曰く、『我いとけなき娘』と。基督ハその感情を動かして幼き者を祝し、且つ憐れみ給ハざるとなく、その傳記を讀む者の尤も感泣ヨ堪えざるハ即ち幼者ヨ接し給ふの光景なり。諸君ハ必ず熟知せらるゝならん、耶蘇ハ幼者ヨ父母たる者の心中を窺ひ知り給ふのみならず、又人情の谷底ヨ潛み入りて更ヨ一層深き水源ヨ

りして愛の水を掬し出し給へり。ラスキン謂へらく、希臘の美術よりも絶へて幼なきものあるとなし。されど基督教の美術ハ之れを以て滿つ。是れ即ち基督の眼光能く小兒の可憐なるを看破し給ひたる明證なりと。

二

右の一例よりて基督の表し給ひたる第二の感情ハ其の感覺の敏捷是れなり。

耶蘇ハヤイロの乞ひよ任せ、瀕死の少女の家よ臨み給ひぬ。途上一人ありヤイロよ告げて云く萬事已よ了りぬ。亦師を煩ハすを須ゐずと。而して耶蘇ハ他人の言ふを待ち給ハず、直ちよ之れよ答へて云く、恐るゝ勿れ、只信せよと。

之れよりて基督の同情の他の一例を觀るを得べし。而して此よ吾等の空しく看過すべからざるとハ、基督ハ他人の已れを信ずると信せざるとよ對して其の感覺極めて鋭敏なりしとなり。基督ハ人の己れを信ずると篤ければ、其の喜悅限りなく、滿面よ笑を表ハし給へり。乞ふ見よ彼のカペナウムよりて百夫の長の僕を生したまひたる一例を見よ。其の病者の家よ入り給ハざるも第一言を出し給ハゞ愈んと言ふを聞き、左右を顧みて之れよ謂て曰く、イスラエルの中よても未だ斯る篤信よ遇さりきと。ヤイロの信仰ハ幾分か之よ劣ると雖しとせざれども、彼も亦明かよ基督を歡したりしなり。是れ基督ハ人の信仰に雲霧のかゝれるを見てハ、之を强めんが爲寸時も躊躇するに忍びざりしを以てなり然れども基督ハ屢〻之れと反對の場合よ遭遇し、且つ此の時よ發動せしめ給へる感情極めて鋭敏あるものあり き。基督ハ常よ信仰の深きを驚嘆し給ひしと雖、又不信仰を驚嘆し給ふと一層多かりき。耶蘇故鄕よ往きてハ、之れが爲めよ殆んど驚くべきの大事とていなし給ふと能ハざりしなり。耶蘇ハ心よ失望する所あれば、その不思議の大能を逞ふする能ハざりき。基督の著しき惠みハ時として感謝の念を激するよ足らず、

彼の十人の癩病者を愈せし場合の如き、歸り來りてその恩を謝したるも、只一人は止まり、耶蘇をして覺えず九人の者も何處にあるやとの嘆聲を發せしめたり。

三

第三は基督が此の時顯はし給ひたる感情も激憤是れなり。

基督の其の家に達するや、女も己は死したりしのみならず。家人も狂奔して葬儀の準備に忙はしかりき。夫れ死は百般の世事の中にも尤も嚴肅なるものなれども、之れを葬るに方りて、殆んど兒戲に類する儀式を用ふると世界万國概ね然らざるなし。就中パレステナの如きは、その極度に達したるものといふべし。一人死するものあれば、數多の職業的弔喪者ありて其の家に來訪し、聲を放ちて泣き、皷を拍ちて悲しむを常とす。今耶蘇の此家に到着し給ひし時は、其の眞最中なりしを以て、耶蘇は自ら堪ふる能はず、一喝その愚蒙を叱し、葬具を退けて家内を一掃せり。

激憤は罪の怒りと親しく相伴ふものなれども、必ずしも害惡にあらず。却てその人の清廉にして自重心あるの證なり。されば秩序、正直、高貴を愛する精神は、紛亂、邪曲、陋劣を見ては決して堪ふる能はざるものなりとす。耶蘇の激憤は聖書の中に屢見ゆ。而して皆此の時の如き不休裁不都合の爲めに發りたるにあらざるなし。惡魔を追ひ出し給ふ時にも怒りて其の叫ぶを責め、風波を靜むるに方りても風伯の無禮を尤め給ふ。抑も「サタナ」の王國は紛亂の王國なり。之れを見ては其の心の激し給ひしも宜なりといふべし。ラザロの墓に近づき給ひし時の如きは、死の力の恣なるを怒り給ひしなり。（娘ラザロを生かせしと同じく基督の感情に付て注意すべき點許多これあり。耶蘇ラザロの墓に近づきし時、心を働し身ふるひて」とあり。然れども希臘語の聖書に依ると語勢一層強し。「働しめ」といふ語は希臘語にては面に現はれたる激憤、不平、怒りと變ふ樣なる意味なり。亦「身ふるひて」といふ語はその怒の爲めに面色の變へ現はれて甚だしきは耶蘇は此の時全身爲めに震ひ、憤怒の情そのさりしなり。此の怒りの原因を尋ぬれば、耶蘇の面は

世の墓なき様を考へ、死の力を何處まで追ひ尋ねしに、全世界は皆死の蔭の谷にてありき。されば已れの前に流せし涙を見て、世に涙のの絶えざるを觀給ひき。即ち死の刺なる罪のみには死の外に尚ほ恐るべきものあるを觀給ひき。……且や耶蘇は此の罪の依りて起る原因即ち福音書に於て屢々此の眞意を了解する時は主が此の時に面れりなり。故に我等若し主の怒りの眞意を了解する時は主が此の時に面色の變るまで怒り給ひしものは、全くその王國の大敵の立ち擾ぐを憂え給ひしことを知るなり。

基督在世中の時勢ゝ特よ此の感情を誘發したるものなり。基督がヤイロの家よりて怒り給ひたるゝ、喪を悲しむ人々のなす所、其の哀情よりせずして職業的よ流れしを厭ひたるを以てなり。然れども此の時の猶太ゝ一大僞善社會よして、聖職を奉するものゝ私利の爲めよ狂奔し、倫常を敎ふる者ゝ名譽の奴隷と化し、人民の師表たる者ゝ却て之れを酷待し、神の言すら其の正しき意味を失ひなり。耶蘇ゝすべての狀態を見て怒りよ堪えず、痛罵激憤その感情を漏らし給へり。

然れども其の怒りゝ聖き火なり。眞を以て僞を燒き、正を以て邪を擊ち、愛を以て私慾を滅ぼすなり。人往々已れ自ら聖からざるよ、他を責めて之れを僞善者と罵るとあり。人の目よ塵あるを見て已れの目よ梁あるを知らざる者、已れの失行敗德ゝ少しも顧ることなくして人の非を訐き、失を難するよ嚴なるもの滔々たる天下殆んど皆是れなり。噫、彼等ゝ皆激憤の假面を粧ふのみ。之れを着けて沐猴冠の誹を免かれたるゝ只耶蘇あるのみ。耶蘇ゝ之れを着けて無雙の威嚴を加へ給へり。人々將よ耶蘇を捕へんとす。耶蘇之れを叱して云く、盜人よ當が如くする乎。又不忠のユダを詭めて云く、爾ゝ接吻を以て人の子を賣す乎と。その祭司の長、ピラト、ヘロデの前よありて慷慨胸よ滿ち、沈默一語を漏さゞりしゝ、却て千万言の辨護よ優れるなり。彼れゝ天よ在りて尙は此の服を脫するとなく、羔の怒りゝ依然として盛なり。

四

第四よ基督が此の時よ顯ゝし給ひたる感情ゝ他人のことを慮ることよして、その感覺殊勝よ優しきことなり。

第四に先づ職業的弔喪者を戸外より驅逐し、死者の室に入れり。然れども單身此に入り給ひしに伴ひあらず、又只伴ひ來れる三人の弟子とのみ此に入り給ひしにもあらず、悲喜の感交、其の胸中に往來せる死者の父母をも此に伴ひ入れ給ひしなり。

其時耶蘇の女の手を取りて、女起きよと呼び給へり。其の先づ手を取りたるに、目醒めし時狼狽せんことを希ふにあらず、却て此の時他に依賴するの感を起さしめんとてなり。人若し非常に激昂する乎、若しくは非常に勞瘁する時に、脈搏常を失ひ、精神感覺を鈍らせども、此の時手を執り、笑を含んで其の情を通せば、心の恐怖を去りて勇氣の回復するに至らざるなかるべし。

基督は立派に之れをなし遂げ給へり。而して其の之れをなすや、利益乘除の念に基かず、只何事よりも基督を導びきて善く最善最美の大功業を成就せしめたる一片優美の感情によりて之れをなし給へり。夫れ人間に過不及の過ちに陷り易く、殊に其の心を激せしめ、其の情を勞したる後に於て意を無用の方向に轉じ、必須の義務を忘るゝを常とす。基督は然らず、其の感情健全にして且つ沈着なりき。されば之れ耶蘇は食物の用意を命じ給ひたるなれ。又耶蘇は野外にありて日夜傳道に身を委ね給ひし時も、集れる者等の歸途にして飢ゑんことを慮り、食を之れに供せんとす。弟子等は事意外に出で殆んどその為す所を知らざりき。基督は知慮と云ひ實行といひ感情の優しきことといひ、遙かに弟子等に超えたり。

五

第五に主が此の時顯はし給ひたる感情は抑損是れなり。

基督は奇蹟を行ひ給ひたる後に堅く人々を戒めて其名を播めざらしめ給へり。癩病を潔めし時に云く『愼て人に告る勿れ』二人の瞽者を愈せし時に曰く『愼て人に知らる勿れ』惡鬼を追ひ出せし時にも例によりて之れを人に知らしむるを禁じ給へり。

福音書に此の例多し。而して余い、未だ眞實の説明を見たるとなし。其の所謂巧妙なる説明と稱するものゝ一二を擧げん乎、或い云く、已れを過賞して却て害ふに至らんとを恐れてなり。或い云く、世人の證言重しとするに足らざればなり。或い云く時世未だ至らざればなり。學者のいふ所概ね斯の如し。幾分の道理此の中に存するとなしとせず。然れども此の諸説い餘りに巧みにして又餘りに奥妙なり。眞實の説明い却て其の表面に在りて存す。蓋し思ふに、基督い大事業家なれば、已れの善行の人に知らるゝを厭ひ給ひしあり。馬太い人をして空しく讀過するを得せしめざる程に明白に此の理を説けり。即ち馬太い基督が多くの人に醫療を施せし後ち、人々を禁しめてその名を知らしむべからずと命せしことを記し、終に云く、是れ『彼い競ふとなく喧ことなし人街に於て其聲を聞ことなし』との預言に應せんが爲めありと。其の遂に人口に上りて愚民を驚動するに至りたるものい、神の爲めに公けの事業を執るものゝ免れざる結果となす。夫れ當今の時勢い、何事も隱秘の間に埋沒するを許さず、人若し少しく非尋常のことをなせば、其の人の履歴い瑣末の點までも穿鑿せられて世の喧傳する所となる。是れ素とより善の性質に反するものにして、最と聖き業をなすものをして神の前に遜りて働くの念を打ち捨て、却て衆人の喝采てふ誘惑に近づかしむるものなり。是れ耶蘇の屑しとせざる所なり。故に若し得べくんば、之れを隱蔽せんとし給ひしなるべし。而して禁ずること愈嚴あれば、其の名聲の傳播愈廣かりしとい、基督の最も堪え難しとせし所なりき。

基督の肺肝を直寫すれば實に右の如くなるべしと思いる。若し博綜して更に例を求め、證を集めなば、一層明白なる説明を得ること難しとせず。されど此の例い福音書中に於ける一箇の好端緒なり。之によりて基督が種々の境遇に處して如何に赤し給ひしかを知らんと欲せば、注意を一點に用ゐざる人の案外なるものあるなり。

又弟子等が基督の感化を受け、何事よ就けても其風を學びたるの迹を發見すると敢て難しとせず。凡そ眞正の宗教の感化ほど潔白なるものい決してその類を見るべからず。福音の熱心よ宣傳せられ、又熱心よ信受せらるゝ國よありてい、人の子の風采靡然として俗をなすよ至るべし。耶蘇の交りい温良の心を養ふと原とよりいふを待たざるなり。

第十七章　感化者たる基督

馬太傳七章二十八
同　八章二十七
同　九章八、二十六、三十一、三十三
同　十二章二十三
同　十三章五十四
同　廿二章二十二、三十三
馬可傳一章四十五
同　二章一、二、十二
同　七章三十六、三十七
同　九章十五
同　十五章五
路加傳二章四十七、四十八
同　四章十五、二十二、三十二、三十七
馬太傳十四章一、二
馬可傳四章四十一
同　十章三十二
路加傳五章八、二十六
同　二十三章四十五、四十八
約翰傳十八章六
馬可傳一章二十三―二十七
同　五章六、七
路加傳六章十一
同　十三章十四
馬太傳二章一―三
同　三章十三、十四
同　四章十九―二十二
同　二十七章十九、五十五
馬可傳一章三十七
同　五章十八
同　十二章三十七
路加傳一章四十一
同　八章四十
同　十一章二十七
同　廿二章六十一、六十二
同　廿四章三十二
約翰傳六章六十八
同　七章

第十七章　感化者たる基督

前章に於ては、耶蘇が日々に遭遇し給ひし世上白般の事物に就き、如何なる感しを起し給ひしかを論述せり。本章に於ては、基督の前に來る者、又基督の行爲を見る者は如何なる感しを起せしかを說かんと欲す。人若し注意して基督の傳記を讀み、人々が如何程迄に彼れに感じ、又如何樣に彼れに動かされしかを熟考せば、その感化の極めて大なりしことを證するもの一として足らざるべし。

老シメヲンは宮殿にありてその腕に幼イエスを抱き『多の心の念の露れんが爲なり』との預言をなせしが、他日基督の言行にありて、著しきものゝ一は即ち是れなりき。夫れ基督に近づき至る者は、何かその心に感するとなくして止むと能はず、怨まざれば愛し、嘆美せざれば罵る。亦その愛憎好惡を示すに於て、一も冷々淡々たりしはあらず、必ずその衷心

より溢れ出づる愛憎好悪よりてありき。「タルムド」の中に一の架空談あり。昔しソロモン王に神の名を刻せる指環を穿ち居たるが、人若しその指環を指し付けらるゝ時に、何れも皆その心に思ひ居ることを直ちに吐き出したりと。今基督の前に出で來りたるものに、之れが感化を受けて心の奥底に潜める思想と感情とを悉く放出し、且つ最善なるものに表はれば即ち最悪なるものを露にさゞるを得ざりしなり。

一

福音書中に見えたる事蹟中、基督の屢〻挑撥し給ひし感情に驚嘆の念に過ぎたるものなし。『彼等怪しみ』『彼等訝かり』『彼等驚きたり』等の語に、前後相接して書中にその跡を絶たず。蓋し人々にその教の優美斬新にして又權力ある事に驚き、又嘗て學びしことなき人の露せる智慧に驚き、殊にその奇蹟に對して喧しきまでに驚嘆し、その奇蹟を行ひ給ひし處へ、急ぎ走せ集ひ、療されたるものにその幸榮を人々に吹聽し、基督の至る所、群民常に堵の如し。

是れ基督の與へ給ひし感動中に尤も普通なるものなれども、耶蘇に之れに至上の重きを置き給ひたるものあらず。基督自己の爲めに是れ不本意の必要たりしなり。耶蘇に群民の蟻集するを見て心に懊惱を抱き、又輕薄なる阿諛を屑しとせざりき。只その一利といふべき點に、群衆の中に眞に基督に要する所ある基督も亦之れに要する所あるものゝ來ることある是なり。即ち其のヤイロの家に至るの途上、其の衣の裔に觸りて愈されたる女の如き是れなり。夫れ基督の衣に觸れし者、群衆の中、何ぞ此の一婦人のみに限らん。然るに此の婦人が戰々兢々として之れに觸れし時、德御身より出でゝ之れを愈せり。されど婦人に群衆に妨げられて容易くに近づくを得ざりき。婦人が基督の至れるを知りしに群民の立ち騷ぎしに由る。兎に角その叫び罵りし聲に彼我の良媒たりしなり。

より溢れ出づる愛憎好悪よりてありき。「タルムド」の中に一の架空談あり。昔しソロモン王の神の名を刻せる指環を穿ち居たるが、人若しその指環を指し付けらるゝ時、何れも皆その心に思ひ居ることを直ちに吐き出したりと。今基督の前に出で來りたるものの、之れが感化を受けて心の奥底に潜める思想と感情とを悉く放出し、且つ最善なるものにあらざれば即ち最悪なるものを露にさゞるを得ざりしなり。

一

福音書中に見えたる事蹟中、基督の屢〻挑撥し給ひし感情に驚嘆の念に過ぎたるものなし。『彼等怪しみ』『彼等訝かり』『彼等驚きたり』等の語に、前後相接して書中にその跡を絶たず。蓋し人々にその教の優美、斬新にして又權力ある故に驚き、又嘗て學びしことなき人の露せる智慧に驚き、殊にその奇蹟に對して喧しきまでに驚嘆し、その奇蹟を行ひ給ひし處へ、急ぎ走せ集ひ、療されたるものにその幸榮を人々に吹聽し、基督の至る所、群民常に堵の如し。

是れ基督の與へ給ひし感動中にて尤も普通なるものなれども、耶蘇の之れに至上の重きを置き給ひたるにあらず。基督自己の爲めに是れ不本意の必要たりしなり。耶蘇に群民の蟻集するを見て心に懊惱を抱き、又輕薄なる阿諛を屑しとせざりき。只その一利といふべき點に、群衆の中に眞に基督に要する所あり基督も亦之れに要する所あるものゝ來ることある是なり。即ち其のヤイロの家に至るの途上、其の衣の裔に觸りて愈されたる女の如き是れなり。夫れ基督の衣に觸れし者、群衆の中、何ぞ此の一婦人のみに限らん。然るに此の婦人が戰々兢々として之れに觸れし時、德御身より出でゝ之れを愈せり。されど婦人に群衆に妨げられて容易くに近づくを得ざりき。婦人が基督の至れるを知りしに群民の立ち騷ぎしに由る。兎に角その叫び罵りし聲に彼我の良媒たりしなり。

又其の別の利益ともいふべきは、當時猶太人の間に於て、稍新宗教に對する風説の冷却せし時なれば、驚嘆の念は彼の基督を必要とせし人々を會堂に招集するの警鐘となりたりき。世若し評判善き説教者の顯はるゝことあらん乎、隨處必ず無數の聽衆を得、名聲頓に廣がりて群民後へに從ふべし。又有名なる傳道者世に出で宗教的のリバイバル勃如として興ると抔あれば、一國爲めに驚動せん。其の喧囂は原より蛙鳴蟬噪の類に過ぎざるべきも、只是れより一二の利益を惹き起すことあるを如何せん。夫れ群民集ひ至れば、その中一人聖体に觸るゝものあるべし。今騷がしく會堂より出で來るものゝ中、只一人閑處に急ぎ向ふもの、其處にて受けたる神恩を擔ひ去るなり。

二

驚嘆は時として恐怖となることあり。耶蘇睡眠より覺めて風と波とを叱し給ひし時、『彼等甚しく懼れたり』とあり。又ナインの嫠の子を生せし時に、『人々みな懼る』とあり。

他の經文より推究する時は、此の恐懼は即ち奇蹟の奇蹟たるを保證する自然の結果なり。奇蹟を目擊する時は、直ちに全能者に咫尺するの感を發す。又神の顯現し給ふことあるや、恐懼生ず。迅雷の轟くを聞きては精神戰ぎ、地震の强きに遇ふては、恐懼を止めんに由なく、强大なる勢力に襲はるゝ時は、身も世もあられぬまでに感するものなり。基督の行ひし奇蹟を見たるものは、耶蘇能く世人とその境遇に稱へることをなし給ふべしと感じたりき。而して世人の耶蘇を恐れたるは、此の漠然たる畏敬の念によてあるなり。

又耶蘇の感發せしめ給ひたる恐懼は、時として基督の人性に威嚴を添へたることありしなり。且つ耶蘇の道念を示すこと尤も確實なるものは、耶蘇畢生の大事といふ時に臨みて他人に與へたる感動を然りとなす。ゲッセマネの門前に於て、捕卒の一隊に遇ひ給ひし時、園中に在りて閃せ

し苦痛恍惚として尚ほ滅えやらず、悲嘆憂悶一方ならざりき。人々耶蘇を見て『退きて地に仆たり』耶蘇ハ其の最後の六ヶ月間ハ、將に至らんとする災厄の上に座し給ひて、之れが爲めに威嚴殆んど近くべからざるの勢なりき。基督の大志ハその容貌動作を削りて之を鋭くし、態度剛直進退急遽、時としてハ深く思ひ入りたるが爲め獨り弟子等に先き立ちて進み出で、弟子等ハおどろき、且おそれて從へり。

然れども未だその傳道に從事し給ハざりし前に於て、ハや已に此の赫々たる威嚴の兆候ありしなり。耶蘇ハ商賈を神殿の外に逐ひ出し給ひし時、即ち初めて預言者的靈氣を現ハし給ひし時、商賈ハ何が爲めに彼れが如くおめ〳〵と北げ去りたるや。商賈ハ多勢なり、而して耶蘇ハ只一人にてありき。商賈ハ富み且つ威勢あり、而して耶蘇ハ匹夫なりき。されど耶蘇ハ爭ハんとも思ハしめざる程に御身に德を有したりしなり。商賈ハ畏敬に堪へざりしなり。罪あるもの、德高き者の前に來ればその威光に恐れて自ら龜縮す。余の知れる一少年、田舍より新に出で來り、當市の或役所に傭ハれしが官吏の談話野鄙猥褻にして腐敗の氣、全聽に充てり。而して此の少年の此に來りし以後、一ヶ月にして、其の面前に於て不潔の語を放つもの一人もなきに至りしといふ。されど少年ハ絶えて激語を吐きしにあらず、全くその純良高潔なる威嚴によりて腐敗を拭ひ去りたるなり

三

耶蘇の爲めに感發せられたる恐懼ハ、時として、敵對の念を惹き起すとあり。されど此の恐懼の念ハ、有限者が無限者に對するの恐懼なり。されど全能者の前に在りて畏怖自ら安からざる者ハ、之れと同時に全知全潔なる者を見たりとの感なくんばあらず。

無學文盲の輩ハ一座皆無學文盲なる時に、能く放談高言す。然れども一たび學者の前に出づる時ハ、勢亡せ、舌訥りて言ふこと能ハず。襤褸を纏へ

る乞丐ゐ、その同輩の間よりていゐ、恬として恥づるとなし。然れども若し盛粧美服せる人の集まれる高堂よ入らば、遽かよ己が衣服の綻び、破れ、垢染みたるとよ心付くべし。是れと同じく完全無疵の者の前よ立つもの誰か己が身を顧みてその不完全なるを感悟せざらん。ペテロが魚の奇蹟を見て『我を絶れよ、我れゐ罪ある人なればなり』と云ひしゐ、これが爲めなり。亦ガダラといへる處よて、人々目前よ耶蘇の奇蹟を見、その海岸を立ち去られんとを乞ひしも同じ道理なり。汚れたるものゐ、聖きの前よありて、畏縮せざるとあきあり。

ファウストといふ悲戯よ於てマルガレットと云へる一童貞ゐ、メフ井ストフエルスの軍人よ扮飾てるよも拘らず、亦その素性を能くも知らざりしよも拘らず、之れを正視すると能ゐず、マルガレットゐ覺えず、その身を縮ませ、

我が身生れてより、此の人の厭ふべき容貌の如く、強く我が胸を刺せしものを見たるとあらず。

といへり。基督の御前よ於てゐ、全く反對の結果を生ず、聖からざる者ゐ敵對の念を起して基督を遁れ去らんと欲す。罪を犯せし婦人、基督の前よ引き出されし時、基督ゐ恥らひて首を俛れ、地よ畫きたりしかば、人々朧ろげながらよその意中を察し、座ろよ恐れを生じ、且つその良心よ責られ、老者をゐじめ、少者まで一々よ出で往き、たゞイエス一人のこる。婦ゐ集の中よ立ちたりき。又耶蘇ゐ鬼よ憑れたる者の側よ近づき給ふや只その近づきしとのみよて驚惶狼狽し、我れを離れよ我れを苦しめざれと請ひ求めたり。蓋し鬼よ憑れたる人よありていゐ、只聖き者を一見してさへ已よ苦しみよ堪えざりしなり。

凡そ最善なるものゝその座よ臨みたる場合よ於て感化服從の功を見ざる時ゐ、反つて反對の結果を現出して人心の奥底よ潜める野獸を奔馳せしむるものなり。されば基督ゐ已れよ反對するものあるよ遇へば

之れをしてその全力を擧げて反對を試ましめ給へり。ピラトを見よ。彼れゝ固とより義の服を着て已れを利するとと、世よ阿ねるを其の主義とせり。其の一代の間ゝ、常よ此の主義よ基きて幾百の事件を處理したりと雖、其ゝ悪く隱微よ屬す。而してピラトが此の主義を公よせしゝ、實よバラバを宥して耶蘇を罪人と定めし時よ係る。ザドカイ及びパリサイ人の卑劣奸曲なるとゝ、人未だ之れを悟らず。その眞相の知れ渡りしゝ即ち耶蘇の光、世よ逃り出で、僞善者の衣服よ存する汚點と破綻とを發き給ひし時よあり。又基督の温良なるとは、却て他人の侮慢を長せしめ、沈默して抗言を試み給ゝざりしとゝ、却て他人の惡口を恣よせしめ論難の鋭鋒ゝ却て他人の迷謬を一層頑固ならしめたり。

此くの如く勝ぐれたる人よ遇へるが爲よ、心の頑固よ成ることあり。アハブ、エリヤよ遇ひし時、之れを叱して云く、ヲヽ我敵よ汝我れを見出したりやと。是れ獨りアハブのみならず、人ゝありその信仰深き母我が爲めよ祈り、又ゝ世の善男女、我が靈性の幸福を計るといふとを聞きたるが爲よ時としてゝ益悪心よ傾くとあり神の證人たるもの、人の侮辱を受くることありと雖、是れ却て我が前よ在りてゝ、彼等その性質の曲れるとを恥づるの證なり、是れ案外よも我が優等なることを證するものなり。『世汝を惡むとも怪しむと勿れ、世ゝ爾曹を惡む前よ、我れを惡みしとゝ、爾曹の知る所なり。』

四

前よ述ぶるが如く、基督の前よ來るものよして敵心を起せしもあれども又或人々ゝ尤も強き感動を擺起せられたり。基督の性質中尤も著しきものゝ道德的の感化となす。基督ゝ罪と結托して之れと離別するの念なきものを拒絶し給ひしと雖、幾分よても生れ更りて立ち優りたる世を送らんとの心掛あるものを近づけ給ひき。

罪の人心よ及ぼす力强大ゝ即ち强大ありと雖、未だ全く良心の根蔕を

抜き去る能わず、何人といへども凡そ罪に反對し之れを防ぐの思ひあきよあらず。放蕩なる者あり、父を棄てゝ他鄉よ流浪ひ、豚を守りて已が口を糊したりしが、遂よ父を思ふの念を起したりといふよあらずや。夫れ人、孤坐して靜思默想する時わ、罪惡なる勁敵已れを纏ひ、之れと絶たざる限りわ、一身の幸福得て望むべからざるよ思ひ至らざるものわらざるべし。

此の念を稱して良心といふ。此の神聖なる一念莫らん乎、人性わ絶望の鄉といふべし。されど良心わ極惡の人よも尙ほ是れあり、眞善の者よ遇ふてわ渴仰自ら禁せず、改過遷善の情を動かすよ至る。良心わ深く罪よ薰染せられたる人をも尙ほ自ら恐れ自ら耻ぢしむ。而して此の良心を感發するよわ施洗者ヨハネの如くよ罪の告白をなさしむるとその功なしとせずと雖、聖き者の前よ出で、不善を憐れむの同情を起すを以てその最良法となす。これ人々をして已が曾て失ひし一事を憶ひ起さしめ、已れの賤しきと足らざるを悟らしめ、又能く情緒自ら平ある能わざらしむるものなり。

耶蘇わ自然よ此の感化力を尤も强く發揮し給ひたり。苟しくも高大潔白の者を見て其の情機を動かすものわ、未だ耶蘇の前よ來りて何等の感覺おくして止むと能わず。獄よ繫かれたる良心わ、耶蘇の聲を聞て直ちよ警起し、その放釋を乞わんとて窓よ詰め寄せ來るなり。醫師の治療を施こし、快刀痼疾の根を絶つや、病人わ之れを彼此よ傳へてその快愈の喜びを語るべし。耶蘇の人類よ於けるも亦然りとなす。すべて重きを負へる者、病ひよ患める者悉く來りてその裳よ蟻集せり。稅吏、罪ある人、パリサイ人よ至るまで、其心よ包める驚異の念を隱し果する能わず、ニコデモわ夜來りて耶蘇を問ひ、ザアカイわ無花菓樹よ上りて耶蘇を拜し、罪ある一人の婦人わ竊かよ之よ近きて涙を以てその足を濕したり。道德上の感化といふよ二種あり、受動的及び自動的是れなり。

此に美よして且つ善なるものあり、能く人の耳目を聳動す。されど自ら斯るべしと信ずるよりあらず、蓋し自ら已れの美を知らざればなり。是れ之れ女性たるものゝ往々見るところよして、此の美德の特性として必ず女性の風を帶び、深く謙遜の狀あるを常とす。斯る光景ゝ接するとゝ我等よりて甚だ稀ならざる所よして、即ち時としてゝ茅屋の中ゝ敬虔と淑德とを兼ねたる婦人を見るとあり、又時としてゝ金殿の中よりあり、驕奢の空氣四邊ゝ充つるゝも拘ゝらず、尙ほ之れゝ染まざる巾幗を見るとあり。何れも人世の惑ひゝ陷らず、人慾の私を却け、超然俗臭を脫したりと雖、さりとて又世の善を見てゝ之れゝ響應し、之れゝ同意を表せざるとなし。是れ即ち我等をして日よりゝもあらず、又月よりゝもあらず、永遠ゝ絕ふるとなき神よりの光を瞥見せしむるの嚮導よてあるあり。

而して此の美德を圓滿ゝ具有し、毫しも缺くる所あかりしものゝ、即ち耶蘇これなり。耶蘇の聖德は萬代ゝ涉りて替らず、燦爛として光輝を放てり。吾等歷史を繙きて、英雄の事跡を監み、その性行を尋ね終ゝ耶蘇ゝ至りて眼を定め、徘徊自ら去る能ゝざるものゝ、これが爲めの故なり。人若し基督ゝ關するとを叙說せんとするゝ方りてゝ、心ゝ驚嘆の念を禁ずる能ゝず、基督敎ゝゝ細大とゝく反對を試むるものと雖、基督のとを述ぶる時ゝゝ尙ほその容を改むるものゝ、即ちこれが爲めの故なり。誰か克く福音書ゝ記されたる基督の傳ゝより讀者の心ゝ生ずる感情を叙し得るものぞ。基督の具へ給ひし德の名を擧ぐるゝ易かるべし。されど其の和樂、完美の德、人を服するの妙ゝ至りてゝ、何人も說き盡くすを得じ、而して斯る完全なる者肉ゝ於て世ゝ降生し、すべて男女その肉眼よて之れを拜するとを得しとゝ。噫。

自動的道德上の感化といふゝ是れと異なり。或種の人ゝ天性一の磁石力を具ふ之れゝ接するものゝ其の引力ゝ吸收せられ、その導びくが儘

よならざると能わず。斯の如き人の事をなすや、全力を盡くす、故よ之れよ吸引せらるゝものゝ、その行路の激流よ捲き込まるゝなり。その行路の惡よ向へるとき斯る人物ゝ罪の領袖たり。蓋し暗の王國も亦天の王國と等しくその使節を有すればなり。我等ゝ此の感化力を養成せざるべからず、福音記者使徒等の精神も茲よありたるあり。

耶蘇の遺訓の中よて最も我等を驚かしむるものゝ、人を誘ふて已れよ從ゝしめんが爲めよ、その職業を容易よ抛たしめ給ひしよ如くゝあし約翰と雅各とゝ、その舟よありて網を繕ひ居たりしが、主の召よ遇ふて、舟も網も、その父ゼベダイをも捨てゝ之れよ從へり。馬太ゝ税吏たり、その地位を捨つるゝ寔よ容易よあらず、然るよ耶蘇の聲を聞て、一切を捐てゝ之れよ赴けり。ザアカイゝ民を虐ぐるものよてありしが、幾ばくもなくして耶蘇を已れの家よ請じ、寛大の人となれり。すべて耶蘇の善行嘉德ゝ、高尚なることをなすよ堪へたる人の情緒よ觸れて、之れを激勵し、摸倣の念禁ずる能ゝざらしめたり。耶蘇ゝ是れ新運動の主唱者又首領よして四方風靡し、熱心、野を燎くが如し。凡そ精神的の首領と稱せらるゝ者ゝ、皆著しく此の勢力を備へ、使徒保羅の如き、サボナロラの如き、ルーテルの如き、ウエスレーの如き、能く聖靈を以てその身を充たし、能く人を導て歡樂を抛ち、人間の一大事の爲めよ私を棄つるの念を起さしめたり。實よ耶蘇の點し給ひたる熱火ゝ多少人をして犧牲献身的の事業を斷行するの勇氣を勃興せしめざるとゝあらざるなり。

今世よ思想家と稱せらるゝ人々が各々已れの感化力を氣遣ふ樣よありたるゝ、祝すべき現象といふべし、夫れ罪の恐るべきことを知らんと欲せば、罪ゝ已れ一人のみよて犯し得べからず、間接よもあれ、直接よもあれ、必定已れ以外の人を此の罪の中よ陷るゝものなることを思ふべし。又之れよ反して已れゝその朋友を害ふことなく、却て之れを益するものなるを信するを得る身とならば、その喜びや限りなかるべし。

是れ嚴肅なる人生を送るゝ須要なる心掛として、又此の世を渡るの指南車といふべし。されど是れ亦危險なしといふべからず。若し我等之れが爲めゝ精神の大部分を支配せらるゝに至れば、精神重荷に堪えず、氣力亡せ去るゝ至るとなしとせず、その容易に生じ來る結果は即ち僞善者となると是れなり。凡そ尤も健全なる感化と云ふは已れを求めず、覺らずして自然に他に及ぶ者是れなり。已れは尤も善く人を動かしたりと思ふ時にても、當人は何の感じもなくて止むこと少しとせず、人は已れの躁り勉むる時は動かずして、何の氣もなくしてなす事に注目するものなり。人は心付かずしてあせる時の言行と、心して推し包まんとする僻心より起るものとを善く辨別するものなり。他人は我等の心に基礎の鞏固なる宮殿あると、その只架空なる唇氣樓に止まるとを割合ひに能く推知するものなり。他人の我等を批評するは意外に精密にして却て肯綮に中る。夫れ人生の價値は、人を感化するの一舉にあり、愼むべきことならずや。

人あり他人を感化せんことを勉む、而して成らず。斯る人に少しも失望すること勿れ、先づ退いて已れを修め、已れを考へ、潔白にして且つ謙遜ならんことを勉めよ。庶幾くは、その目的を達するものとなるを得ん。我等の德の進むとは、一歩は一歩よりも世を益し、事を神くるものなり。夫れ人を感化するは、義務と忠實との外にその道あるべからず。人々に、益〻基督に近づき、愈〻已れの胸襟を打ち開き、而して基督より出づる感化を受けよ。されば已れの心付きたると然らざるとを問はず。――先づ心付かざる方善かるべけれども――人をして神に近づかしめ、又神の力を人に輸すこと疑なかるべし。『爾曹われに居さらば我また爾曹に居ん枝若し葡萄樹に連らざれば、自ら實を結ぶこと能はず、爾曹も我に連らざれば亦此の如くならん』

明治二十四年十月八日印刷
明治二十四年十月九日出版
版權登錄

定價三十錢

譯者　東京麹町區三番町十番地　植村正久
同　東京芝區白金臺町一丁目二十二番地　田中達
發行兼印刷者　東京深川區相川町二十番地　山内量平
發行所　東京麹町區三番町十番地　南海堂
發賣所　東京々橋區築地二丁目二十二番地　一二三館
關西大賣捌所　大坂西區土佐堀三丁目　福音舍
印刷所　東京日本橋區上槇町十六番地　八重洲橋印刷會社

版權所有

基督のすがた前編に對する諸新聞雜誌の批評

●女學雜誌（第二百七十一號）曰く……讀みて心の靈化し、道念の活き返ることを感するに、植村正久、田中達兩氏が合譯にかゝる「基督のすがた」なりとす。元書に名たゝる基督傳記者ゼームス、スタウカルが近著なれば、見る所の高潔にして、着眼の鋭利なる、云ふ迄もあけれど、譯者が之に同感同情を表して、意會し、筆隨ふの妙地に至らずんば、何を以て此の譯文を得んや。「晩餐の禮に主が客を愛し、人を饗するを好みし給へる最も著明なる例證あり。其死を表するもの何ぞ餅酒に限れりとせん。然れども其福音に親睦和樂の福音なり、故を以て耶蘇に世終る迄其晩餐の席に主人公となり、其容貌に厚情藹然として掬すべく、其胸中に寛宏にして吝みなきの氣概を滿たしめたまふ、其背後の壁間に語あり、曰く此人に罪あるものを受け容れ之と共に食ふ」と、此般の文思所ろ〳〵に充つ。情濃やかにして思切なるの人にあらずんば、得て此類の研究を爲すと能はず。……第三の文（即ち「基督のすがた」を指す）に無花菓の葉茂る木の下かげに、經書をくりかへして、靜讀默禱、信念潮の湧くが如く、跪づきて感謝する人の歌の聲に似たり。云々

●國民の友（第百二十三號）云く……俳おがら激浪怒濤天を衝くの際に於て、人々動すれば魂消えて爲すべき所を知らず、徒らに魚腹を肥すの恐なきに非ず、若し其時に臨みて生命の燈臺ありて之を照さば、人々の氣強きこと如何ばかりぞや、基督教徒にとりて、基督は即ち此の如き者なり、我輩今幸ひに此に彼書（金森通倫氏の新著「日本現今の基督教幷に將來の基督教」を云ふ）とあいせて「基督のすがた」を讀者諸君に推薦するを得るの幸なるを感ず、而して後者の飜譯者一人に基督教社會に鋒々たる譽ありて、其地位決して讓らざる植村正久氏なること殊に讀者の滿足する所ならん、是則ちローランドを以てオリヴァルに對せしむるなり、是また均しく天の賜物なり、云々

●日曜叢誌云く トマス、エ、ケンピの著書世に出で之を讀誦する者い賢となく愚となく男となく女となく皆な乳と蜜の其中に流れ天の糧の其中に豊なるを發見し欝悶爲めに去り憂苦爲に慰められ而して高尚純聖の思想の眼開かるゝ心地せり今に至て陳腐の憾あき能いずと雖も天下の信仰を感化敎撫する勢力い猶ほ將に蕩々乎として千載に流れんとす、吾人い未だ「基督のすがた」果して是の如き能力あるや之れに代るの價値あるや否やを知らずと雖も、祈禱冥想の伴侶、人生の指南車たるに恥ずる此書と云ひ「基督の心」と云ひ信仰の食とあるべきものゝ刊行さるゝに至りしい今や信仰の一陽來復已に來れるをトすべし鴨長明歌あり曰く　春といへば吉野の山の朝霞年をもこめていやたちよけり　吾人も亦た正に此感あり

●基督敎新聞(第四百十七號)云く蘇國有名の博士ゼームス、スタウカル氏の著書として十七章より成る「イマゴ、クリスチー」中より最も有益の部分を植村正久田中達兩氏が合譯せし者を『基督のすがた』とす本書の目的いキリストが如何に人生に處し給ひしやを探究し以て其完全の摸範を明示するにあり スタウカル氏曰く倫理の部面に於ていエスの敎訓その言行のみあるにあらずして又摸範にありと又曰く單に己れの理想に依賴して漫然基督の聖德を描き出さんとするい是れ足れ其戸外に出でずして已れの工場に靜座し山川原野に關する概念力を以て風景を寫す畫工と異なることなきありと余輩の一讀せる所に由れば本書八章中第一章トマス、エ、ケンピの基督(イミテーション オブ クライスト)の摸擬を批論せし者、第二章家庭に於ける基督、第三章國家に於ける基督、第四章敎會に於ける基督、第五章朋友として基督、第六章社會に於ける基督いに最も有益の文字なりと思ふ唯余輩が本書に付聊か隔靴搔痒の感を爲すい譯文の稍飜譯的の臭味を帶びて問々解し難き所あるとあり然れども之れ只白玉の微瑕必ず一讀すべき良書なり安評多罪

●東京經濟雜誌(第五百七十八號)云く此の書い蘇國の自由敎會に在りて屈指の秀才たるゼームス、スタウカル氏の著せる所にして、植村正久田中達の兩氏之を邦文に飜譯せるものなり、ウイルリヤム、エム、テイロル氏此の書に叙して曰く、スタウカル氏が己れの新機軸を用ゐ至深なる敬虔の念に基きて、基督の摸範を描きし本書基督のすがたい、結構斬新、文體明了所見該博にして且つ暗示的に富めり、余輩い冥想祈禱の伴侶、人生の指南車と爲すに適せるものとして、之を推薦するものなりと、以て本書の價値あるを知るべし

●眞理(第二十一號)曰く『基督のすがた』いゼームス、スタウカルの原著にして植村正久田中達兩氏の共譯に係る既刊の前編い都合八章より成り其題目い緒論トーマス、ケンピの『基督の摸擬』、家庭に於ける基督、敎會に於ける基督、國家に於ける基督、聖書の研究者たる基督、朋友としての基督、社會に於ける基督、祈りの人なる基督等なり吾人い此書の靈魂の糧として滋養分に富むことを喜ぶと共に其の弘く且つ永く世に愛讀せられんことを望むものなり蓋し如何なる大著傑作と雖も靈魂の饑渴を醫するに足るものはあらざるよりい決して弘大、永遠の眷顧を期すべからざるなり彼の聖書と云ひ、彼の「基督の摸擬」といひ皆な其時代の臭味を帶ぶるを免れざるにも關らず最も弘く最も永く世に行はるゝものの其の核實の美なる容易に之を他に求め難き故にあらずや聞く該書の著者い蘇國自由敎會に屬し曾て學を獨逸に修めたる人なりと誰か曰ふ自由派に精神なし自由派の神學者い空論をのみ喋々すと世の食いずして物の味を說くもの此書を讀で何等の感かあるべし

福音新報第二十五號に自由の字を妄用する勿れと題して云く

『基督のすがた』の著者い蘇國自由敎會の宣敎師ジエームス、スタウカルなり。眞理記者基督のすがたを評して曰く自由敎會の牧師にして斯の若き著述あり。誰か自由派を以て熱心を欠くものとするやと(蓋し其文の意味を約言するなり)此い記者が千慮の一失ならん。スタウカル氏い自由敎會の人なり。然れども蘇國の自由敎會の所謂自由派に非ず。眞理記者の唱

ふる神學を以て自由とし、他を以て不自由なりと附會するときハ或ひハ是の如き過失ヨ陷らざるを保する能ハざるべし。自由の境界ハ幸ヨして左る狹隘なるものヨ非るなり。

●野聲反響（第八號）云く山路渦極まつて清泉の音涓々たるを聞くの感あるものハデヴォーショナル、ブックの甚だ欠乏せる我基督教文學界ヨ突如として現れ來れる『基督のすがた』あり。槙村正久、田中達兩氏譯東京麹町區三番町十番地南海堂發行定價二十五錢

一二三館發賣目錄

創世記註疏第一卷 第二卷 定價 廿五錢
馬可傳注釋 全價 三十五錢
哥林多後書註解 全價 三十五錢
提摩太前書註解 全價 廿五錢
約翰一二三猶太書註解 全價 二十錢
聖地古事 全價 四十錢
聖靈のはたらき 全價 三十錢
二法一元論 全價 二十錢
聖書汎論 全價 廿五錢
聖書釋義 全價 廿五錢
道の雙紙（一名心のかて） 全價 三十五錢
哲學評論 全價 十錢
不發物論 全價 十五錢
男子女子 全價 十錢
教會政治摘要 全價 十五錢
天路歷程 全價 二十錢
英文奇事問答 全價 四十錢
酒の害 全價 三十錢
百合苑 全價 十五錢
ヲルガン教科書 全價 五十錢
奇蹟評論 全價 十五錢
花鳥錦繪摺教の札 百枚 五十錢
新撰教の札 百枚 五厘ヨリ五十錢迄

●舶來カード

奇談集 全價 十錢
靈魂篇 全價 十錢
迷の霧 全價 三十五錢
佛教新解 全價 三十五錢
印度史 全價 廿五錢
米國政教論 全價 廿五錢
禁酒美談 全價 七十錢
ゴルドン傳 全價 廿五錢
カルビン傳 全價 十八錢
基督教防衛論 全價 十二錢
博愛眞語 全價 十錢
人類學一班 全價 十五錢
舊約史論 全價 十錢
●日用學校教科書 全價 十錢

●聖地地圖 掛物 三十五錢 折本 十錢
耶蘇教畧問答 三錢
基督教四大要門 六錢
基督教聖歌集 十錢

●十誡教の札 百枚 一包 價廿五錢
●大形教の札 美麗 花形 同價三十五錢
●中形教の札 同 同價廿五錢

一弊店ハ内外各國ノ基督教ニ關スル一切ノ書籍ヲ販賣仕候且又内外ノ各科書籍モ多少ニ係ラズ御注文ニ應シ精々低廉ニ仕切リ取寄セ發送申べク候

一洋書御注文ノ節ハ成ベク片假名又ハ歐文ニテ書籍ノ原名御申越可被下候

一書籍御注文ノ節ハ總テ前金御送附被下度運送費ハ弊館ニテ支辨可仕候

但シ金壹圓以下ハ運送費ヲ申受候

一各地賣捌取次所諸君ヘハ此等ノ稟告外特別ノ減額仕ルベク候

一御送金之節ハ銀行爲替又ハ郵便爲替等其他御便利ヲ以テ御送附可被下候

但シ郵便爲替ハ當地「新富町」郵便爲替取扱所ニテ請取ベキ樣御取組被下度候

一郵便切手ヲ以テ送金御代用ノ節ハ一割增ニテ御送附可被下候

一荷造ノ儀ハ精々注意堅固ニ仕候得共萬一途中破損紛失等ノ節ハ積問屋或ハ飛脚屋ヨリ辨償致シ候外弊店ニテハ負擔不仕候

一書籍遞送ノ際ハ必ス案内狀差出シ可申尙ホ御注文ノ品々切レ又ハ調達ノ爲メ遲延可致節ハ理由書差出シ可申候

一東京府下ニ限リ御注文次第迅速持參可仕候

一弊店ヘ御書狀又ハ電信御遣ノ節ハ御地名番地御姓名等明瞭ニ御認メ被下度且ツ必ス（東京々橋區築地二丁目二十二番地一二三館）ト御認メ被下度候

東京市京橋區築地二丁目二十二番地

基督教書藉發行所　一二三館